埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第48集

前中西遺跡ⅩⅣ

２０２４

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第48集

まえなかにし い せき

前中西遺跡ⅩⅣ

２０２４

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在しております。そして、これらの遺跡内では様々な工事が行われ、遺跡を保護・保存できない場合があります。このような状況が発生した際には、発掘調査を実施して記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っております。

本書は、2023（令和５）年度に発掘調査を実施した前中西遺跡について報告するものでございます。前中西遺跡の所在する上之地区では、熊谷市が進めております土地区画整理事業に伴い、事前に発掘調査を実施しております。本遺跡では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が多数確認されており、特に弥生時代につきましては、当地域における大規模かつ拠点集落であったことが明らかになってきております。このたび報告する調査地点におきましても、本遺跡のこうした様相を裏付ける大変貴重な成果を得ることが出来ました。

今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解・御協力を賜りました棚澤　肇氏をはじめ、地元関係者及び工事関係者に厚くお礼申し上げます。

令和６年 11 月

熊谷市教育委員会
教育長　**野原　　晃**

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業52街区６画地（従前地：熊谷市上之字衣川2573番６他）に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59 － 092）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理・報告書作成に係わる費用は、事業者の棚澤　肇氏にご負担していただいた。

3　本調査は、集合住宅建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、整理・報告書作成も含め、熊谷市教育委員会が実施した。

4　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

5　発掘調査期間は、2023（令和５）年９月14日から29日まである。整理・報告書作成期間は、2024（令和６）年６月17日から11月29日までである。

6　発掘調査の担当及び本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

7　発掘調査における写真撮影及び出土遺物の写真撮影は、松田が行った。

8　基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託して実施した。

9　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

10　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）

棚澤　肇　　パナソニックホームズ株式会社茨城支社

青木克尚　　石川日出志　　植木雅博　　柿沼幹夫　　金子正之　　小林　高　　菅谷浩之

知久裕昭　　富田和夫

埼玉県教育局文化財・博物館課　　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

調査区全測図…１/100　　住居跡・方形周溝墓…１/60　　土坑…１/40

2　遺構挿図中のトーンは、次のとおりである。

＝地山

3　遺構挿図中、断面図に添えてある数値は、標高を示す。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

土器・石器・石製品…１/４

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

弥生土器・石器・石製品：白抜き　　須恵器断面：黒塗り

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物番号の後にＡが付く土器は、赤彩が施されていることを示す。

8　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位は、㎝、ｇである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物などを以下の記号で示した。

Ａ：白色粒子　　Ｂ：黒色粒子　　Ｃ：赤色粒子　　Ｄ：褐色粒子　　Ｅ：赤褐色粒子

Ｆ：白色針状物質　　Ｇ：長石　　Ｈ：石英　　Ｉ：白雲母　　ｊ：黒雲母

Ｋ：角閃石　　Ｌ：片岩　　Ｍ：砂粒　　Ｎ：礫　　Ｏ：金雲母

9　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

10　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖 36版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行　2014）を参考にした。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　遺跡の概要 …… 9
　1　調査の方法 …… 9
　2　検出された遺構と遺物 …… 9
Ⅳ　遺構と遺物 …… 11
　1　住居跡 …… 11
　2　方形周溝墓 …… 27
　3　土坑 …… 32
　4　遺構外出土物 …… 33
Ⅴ　調査のまとめ …… 37

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図 …… 3
第２図　周辺遺跡分布図 …… 5
第３図　調査地点位置図 …… 8
第４図　調査区全測図 …… 9
第５図　第１号住居跡 …… 11
第６図　第１号住居跡出土遺物（１） …… 13
第７図　第１号住居跡出土遺物（２） …… 14
第８図　第２・３号住居跡 …… 17
第９図　第２号住居跡出土遺物（１） …… 18
第 10 図　第２号住居跡出土遺物（２） …… 19
第 11 図　第３号住居跡出土遺物 …… 23
第 12 図　第４号住居跡 …… 24
第 13 図　第４号住居跡出土遺物 …… 25
第 14 図　第１号方形周溝墓 …… 28
第 15 図　第１号方形周溝墓出土遺物 …… 29
第 16 図　第１号土坑 …… 32
第 17 図　第１号土坑出土遺物 …… 33
第 18 図　遺構外出土遺物 …… 34

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 …… 15
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 …… 20
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 …… 23
第５表　第４号住居跡出土遺物観察表 …… 26
第６表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表 …… 30
第７表　第１号土坑出土遺物観察表 …… 33
第８表　遺構外出土遺物観察表 …… 35

図版目次

図版１　調査区全景(南から)
調査区全景(東から)
遺構
図版２　第１号住居跡(南東から)
第２号住居跡(南東から)
図版３　第２号住居跡遺物出土状況(１)
第２号住居跡遺物出土状況(２)
第７号住居跡遺物出土状況(３)
第７号住居跡遺物出土状況(４)
第３号住居跡(南から)
図版４　第４号住居跡(南東から)
第４号住居跡遺物出土状況(１)
第４号住居跡遺物出土状況(２)
第４号住居跡遺物出土状況(３)
※第１号方形周溝墓北周溝出土
発掘作業風景
図版５　第１号方形周溝墓(南東から)
第１号土坑(南東から)
遺物
図版６　第１号住居跡　第６図１・２・３
第２号住居跡　第９図１・２・３・４・５
図版７　第２号住居跡　第９図６・６底面・８
第３号住居跡　第11図１・１底面
第４号住居跡　第13図１・２
図版８　第１号方形周溝墓　第15図１・２・３・４・
５・５底面・６
遺構外　第18図１・１底面
図版９　第１号住居跡　第６図６～26・27～48
図版10　第２号住居跡　第９図９～22・27～38
図版11　第３号住居跡　第11図２～11
第４号住居跡　第13図３～９・10～26
図版12　第１号方形周溝墓　第15図７～27・28～
47
図版13　第１号土坑　第17図１～４
遺構外　第18図２～11・12～24・28
図版14　第１号住居跡　第７図49～53
第２号住居跡　第10図40～48
図版15　第２号住居跡　第９図39
第４号住居跡　第13図27
第１号方形周溝墓　第15図48
遺構外　第18図25～27

Ⅰ　発掘調査の概要

１　調査に至る経過

2023（令和５）年７月 28 日、事業者である棚澤肇氏より文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事内容は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業 52 街区６画地（従前地：熊谷市上之字衣川 2573 番６他）地内における集合住宅建設である。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業予定地内が前中西遺跡（埼玉県遺跡番号№.59-092）に該当し、縄文時代から近世までの遺構・遺物が所在する箇所であることから、2023（令和５）年８月 24 日に遺跡の所在を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、集合住宅建設予定地北側の現地表面下 1.3 ｍで弥生時代の遺構・遺物が確認された。

事業者から提出された工事内容は、集合住宅の基礎に深さ 3.5 ｍの柱状改良工事を伴うものであった。そのため、計画どおりの工事では遺跡が破壊されてしまうことから熊谷市教育委員会では事業者へ発掘調査を実施し、記録保存をするか、もしくは工事計画の変更が必要となる旨を伝えたところ、工事計画の変更は不可能であるとのことから遺跡が確認された住宅建設予定地北側を対象に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。この結果を踏まえ、熊谷市教育委員会では、2023（令和５）年９月７日付け熊教社埋発第 418 号で埼玉県教育委員会教育長へ記録保存の措置が適当である旨を副申とした「埋蔵文化財発掘の届出」を送付した。そして、事業者あてには、埼玉県教育委員会教育長から 2023（令和５）年９月７日付け教文資第４－ 1248 号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知により発掘調査実施の指示がなされた。その後、発掘調査の実施について具体的な協議を重ねた結果、熊谷市教育委員会が調査主体者となり、実施することとなった。

事業者の棚澤氏とは、2023（令和５）年９月７日付けで埋蔵文化財に関する協定書を締結し、同年９月 11 日付けで埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」は、熊谷市教育委員会から 2023（令和５）年９月７日付け熊教社埋発第 419 号で埼玉県教育委員会教育長あてへ送付した。記録保存のための発掘調査は、2023（令和５）年９月 14 日から 29 日まで実施した。

２　発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

発掘調査は、2023（令和５）年９月 14 日から 29 日まで実施した。調査面積は、42.12 ㎡である。調査は、まず重機で表土を遺構確認面まで掘削し、その後作業員を導入して遺構確認作業を行った。そして、遺構の掘削、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、最後に器材の撤収と重機で調査区の埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（２）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、2024（令和６）年６月 17 日付けで事業者の棚澤氏と埋蔵文化財包蔵地発掘調査（整理・報告書作成）の委託契約を締結し、同年 11 月まで実施した。作業は、６月中旬から７月上旬まで遺物の洗浄、注記、接合、復元などの作業を行い、併行して遺構の図面整理を行った。７

月月中旬から８月末までは、遺物の実測・拓本・トレース及び遺構のデジタルトレースを行い、遺構・遺物の版組を作成した。９月上旬から中旬までは、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、原稿執筆、編集作業を行った。そして、９月下旬に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行い、11 月下旬に報告書を刊行した。

３　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

教育長	野原　　晃
教育次長	権田　宣行（2023（令和５）年度）
	三友　孝二（2024（令和６）年度）
社会教育課長	原　　光則（2023（令和５）年度）
	小澤　信行（2024（令和６）年度）
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課副課長兼文化財保護係長	松田　　哲
社会教育課文化財保護係主査	茂木　留美
主査	小島　洋一
主査	腰塚　博隆
主任	森田　安彦
主事	山川愛希子
主事	大野美知子
主事	山川　守男
発掘調査員	礒﨑　　一

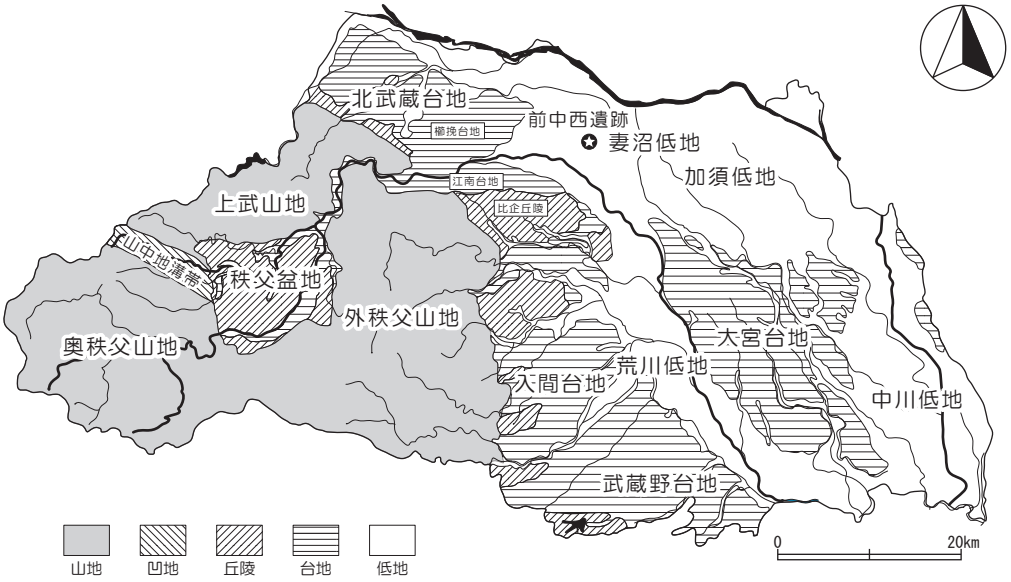
Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県北部に位置し、県北最大の人口を有する市である。総面積159.82㎢を測る市の北側を利根川、南側を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の二大河川が最も近接する地域にある。地形的には、西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側に江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であり、大里郡寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はＪＲ東日本籠原駅から北へ約２㎞の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54ｍを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新期荒川扇状地の扇端部、標高24ｍ前後に立地している。遺跡は、熊谷市上之、中西三・四丁目、箱田に所在し、ＪＲ東日本熊谷駅からは北東へ約２㎞、荒川からは北へ約３㎞、利根川からは南へ約６㎞の距離にある。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。本遺跡周辺では、縄文時代後期から遺跡が確認されている。東に隣接する諏訪木遺跡（２）では、過去に行われた熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002･2007）において後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構・遺物が確認されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。また、西に隣接する中西遺跡（４）でも後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構・遺物が確認されており、北東約２㎞に所在する古宮遺跡（11）では、晩期前葉から中葉までに限定された遺物包含層が確認されている。当段階の遺跡は、



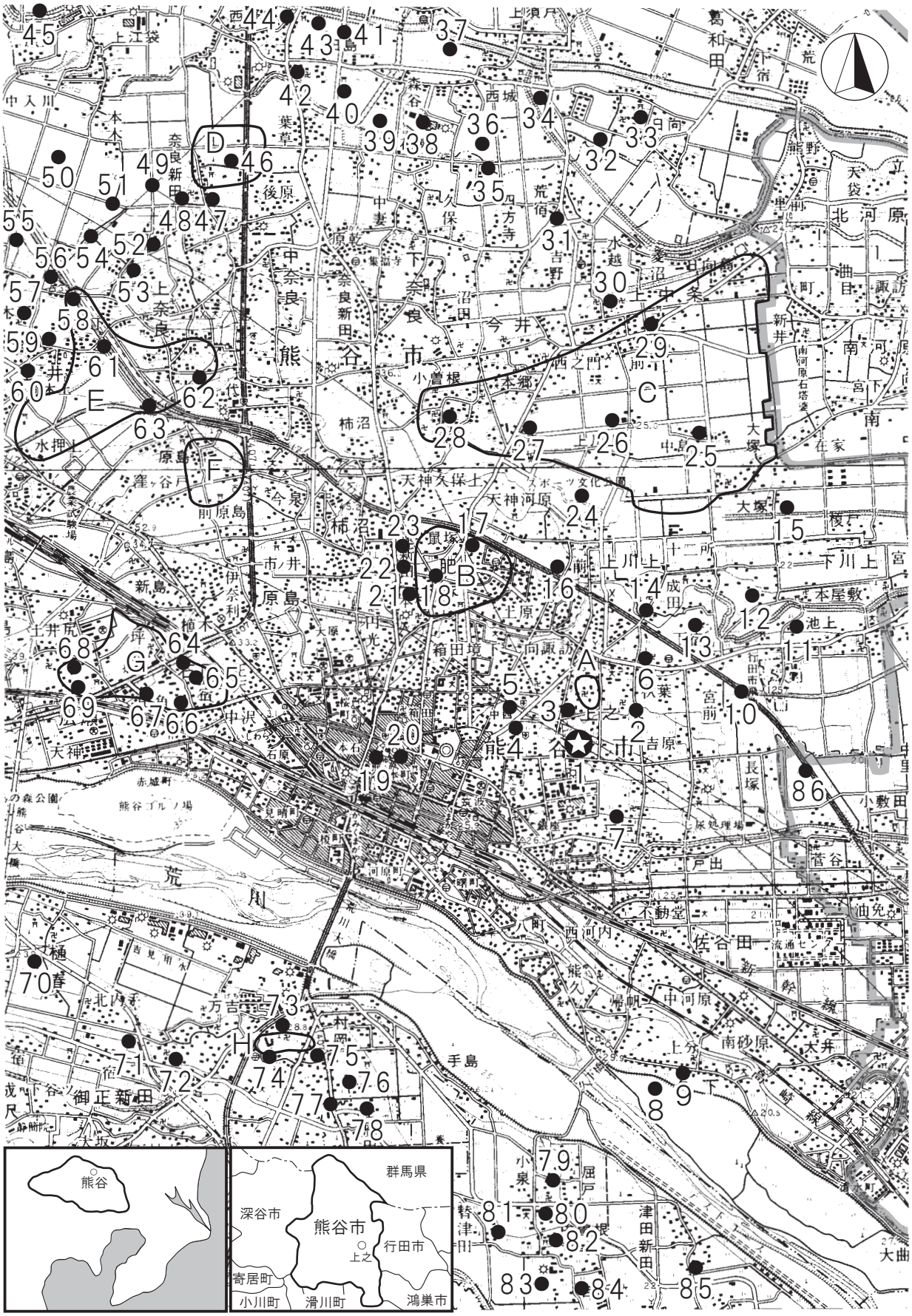
第１図　埼玉県の地形図

この他にも市北部の妻沼低地上に西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（42）などがある。晩期中葉以降は、途絶えてしまうが、本遺跡や櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では、晩期末の浮線文土器が検出されている。いずれの遺跡も遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階の前期末から中期前半は、北に隣接する藤之宮遺跡の 2002（平成 14）年度に実施した調査で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。当段階の遺跡は、櫛挽台地直下ないし妻沼低地北部の低地上に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、先の深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで再葬墓が確認されているにすぎない。なお、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土している。

中期中葉になると、これまでの状況と一変して集落が集中して出現する。後期前半まで長期間続く本遺跡の他に東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（10）、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（86）、独立棟持柱建物跡が確認された古宮遺跡などが出現し、本格的な農耕集落が展開される。池上遺跡は、出土遺物 67 点が 2017（平成 30）年に、小敷田遺跡は、方形周溝墓出土土器 15 点が 2018（平成 31）年）に県の有形文化財（考古資料）に指定されている。中期後半は、前段階に続いて営まれる本遺跡の他に諏訪木遺跡や北島遺跡（24）などが出現する。特に本遺跡は、これまでの成果から当地域における大規模かつ拠点集落であることが判明しており、中期後半以降、長野県北部を中心とする栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、長野県外では初の事例となった礫床木棺墓や大阪湾型銅戈を忠実に模倣した全国初の石戈などが確認されている。北島遺跡では、大規模集落の他に水田や水路、堰などの生産域も確認されており、本遺跡とともに東日本屈指の遺跡として注目される。後期以降については、当時の気候変動などの影響からか遺跡数が急激に減少し、本遺跡以外確認例がなく、遺跡は台地や丘陵へと移っていく傾向にある。

古墳時代になると、再度低地上への進出が活発化し、前期の遺跡は、近年確認例が増加している。本遺跡以外にも周辺では、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡などで集落跡が確認されており、方形周溝墓による墓域も確認されている。また、中西遺跡では、方形周溝墓の他に前方後方型周溝墓も確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた諏訪木遺跡の調査では、河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧（ひぶくらはぎ）」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008）。中条遺跡（29）では、木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期は、たくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて藤之宮遺跡や中条遺跡などで集落跡が確認されている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（Ｃ：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（Ｄ：奈良古墳群）などの古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長 43.8 ｍの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡二箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長 46 ｍを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はＢ種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			49	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
1	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳・奈良・平安、中・近世	50	別府条里遺跡	奈良・平安
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中・近世
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
4	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	53	奈良氏館跡	平安末～中世
5	箱田氏館跡	平安末～中世	54	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
6	成田氏館跡	中世	55	寺東遺跡	縄文前～後
7	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	56	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
8	久下氏館跡	中世	57	玉井陣屋跡	平安末～中世
9	市田氏館跡	中世	58	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
10	池上遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安	59	水押下遺跡	古墳後
11	古宮遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	60	稲荷木上遺跡	古墳後
12	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	61	下河原中遺跡	奈良・平安
13	宮の裏遺跡	古墳後	62	本代遺跡	古墳後、近世
14	成田遺跡	古墳後	63	下河原上遺跡	近世
15	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	64	天神前遺跡	古墳中・後、中世
16	河上氏館跡	中世	65	兵部裏屋敷跡	中世
17	八幡上遺跡	古墳後	66	御蔵場跡	近世
18	出口下遺跡	古墳後	67	田角遺跡	平安
19	熊谷氏館跡	中世	68	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
20	宮町遺跡	奈良・平安、中世	69	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
21	肥塚館跡	中世	70	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
24	北島遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安、中世	73	村岡館跡	平安末
25	上中条中島遺跡	古墳前・後、奈良・平安	74	村岡北西原遺跡	平安
26	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	北西原遺跡	奈良・平安
27	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	東浦遺跡	古墳前、平安	77	西浦遺跡	奈良・平安
29	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	78	腰廻遺跡	奈良・平安
30	中条氏館跡	中世	79	北方遺跡	奈良・平安
31	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	80	宮前遺跡	奈良・平安
32	先載場遺跡	古墳後、奈良	81	西浦町遺跡	奈良・平安
33	八幡間遺跡	古墳後、奈良	82	宮前町遺跡	奈良・平安
34	東城館跡	平安	83	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	仲町遺跡	奈良・平安
36	西城館跡	平安	85	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後・晩	行田市		
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
40	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	熊谷市		
41	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
42	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	宮前遺跡	奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	実盛館	平安	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、奈良	E	玉井古墳群	古墳後
46	横塚遺跡	古墳前、平安	F	原島古墳群	古墳後
47	東通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	西通遺跡	古墳後	H	村岡古墳群	古墳後

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では、本遺跡北東に位置する上之古墳群（A）のほかに、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね６世紀から７世紀末ないし８世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では、埋葬

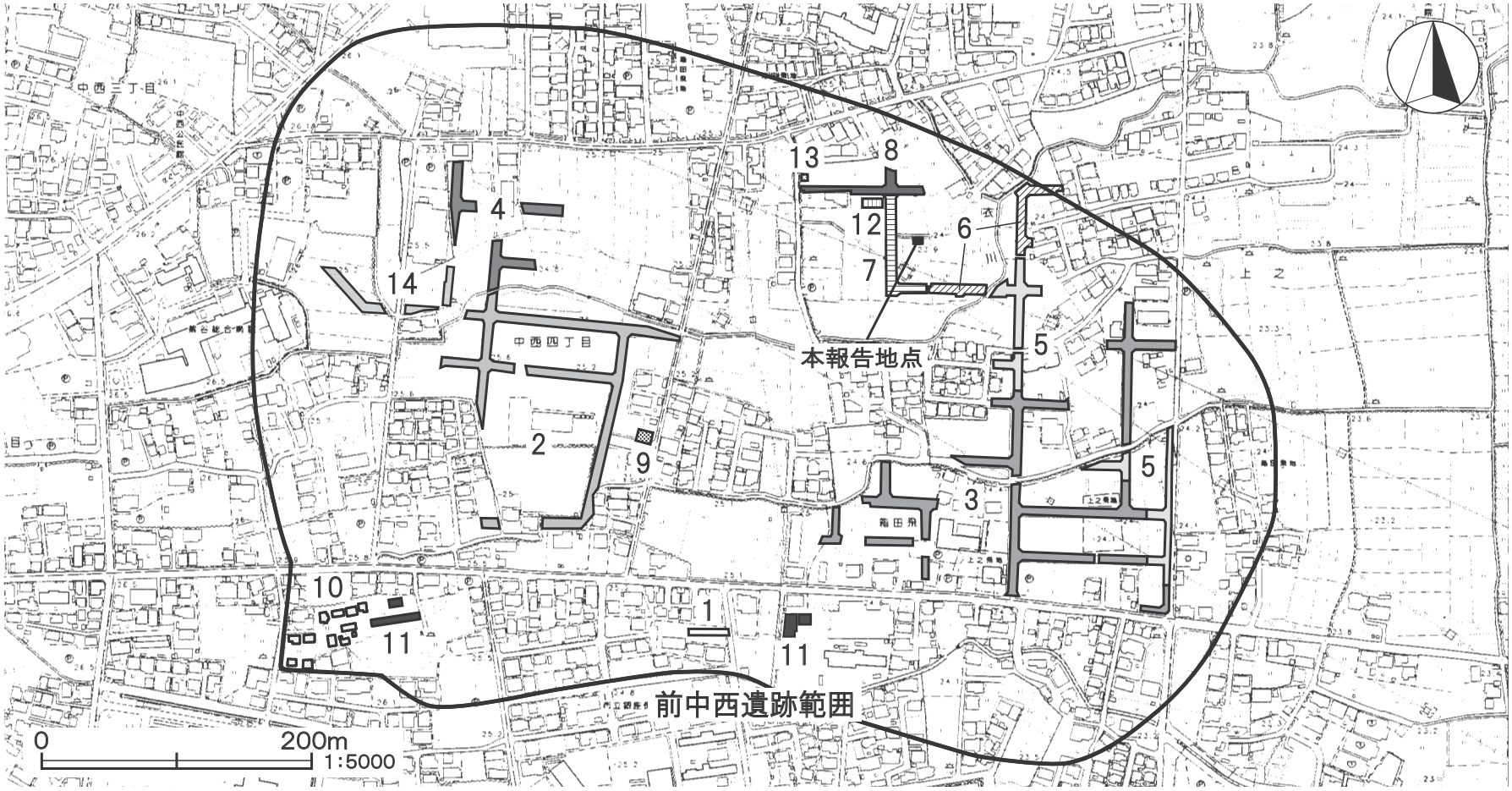
施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による第 19 地点の調査では、二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。また、池上遺跡では整然と配置された 9 世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立柱建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川跡から土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われていたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡が集中する。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（15）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡が残る。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（６）、久下氏館跡（８）、市田氏館跡（９）、河上氏館跡（16）、熊谷氏館跡（19）、肥塚館跡（21）、中条氏館跡（30）などがある。このうち、本遺跡北東に位置する成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が 15 世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、館跡に隣接する諏訪木遺跡で行われた過去の調査では、成田氏関連と思われる遺構や遺物が相次いで確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による 2001（平成 13）年度の調査では、館跡から南に約 300 ｍの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002）。また、2002（平成 14）年度の調査では、井戸枠に器高 70 ㎝を超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は 13 世紀中頃のものと推定されている（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008）。そして、熊谷市教育委員会による 2008（平成 20）年度の調査では、埴輪を持つ６世紀代の古墳の周溝が埋没した後に掘削された長方形の土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は、15 世紀前半を上限とし、枚数がおよそ 14,000 枚と膨大であることから成田氏に関連するものであることは間違いない（熊谷市教育委員会 2020）。

中世段階については、諏訪木遺跡で成田氏を想定させる遺構や遺物が確認されていることなどからその一端が明らかになりつつあるが、全体像を把握するには、まだ資料が不足している。また、近世段階についても中世と同様であり、諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。



1 『前中西遺跡』(1999)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
2 『前中西遺跡Ⅱ』(2002)報告地点(熊谷市教委)
3 『前中西遺跡Ⅲ』(2003)報告地点(熊谷市教委)
4 『前中西遺跡Ⅳ』(2009)報告地点(熊谷市教委)
5 『前中西遺跡Ⅴ』(2010)報告地点(熊谷市教委)
6 『前中西遺跡Ⅵ』(2011)報告地点(熊谷市教委)
7 『前中西遺跡Ⅶ』(2012)報告地点(熊谷市教委)
8 『前中西遺跡Ⅷ』(2013)報告地点(熊谷市教委)
9 『前中西遺跡ほか３遺跡』(2013)報告地点(熊谷市教委)
10 『前中西遺跡Ⅸ』(2014)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
11 『前中西遺跡Ⅹ』(2016)報告地点(熊谷市遺跡調査会)
12 『前中西遺跡Ⅺ』(2016)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
13 『前中西遺跡Ⅻ』(2018)報告地点(熊谷市教委)
14 『前中西遺跡ⅩⅢ』(2023)報告地点(熊谷市教委)

第３図　調査地点位置図

Ⅲ　遺跡の概要

１　調査の方法

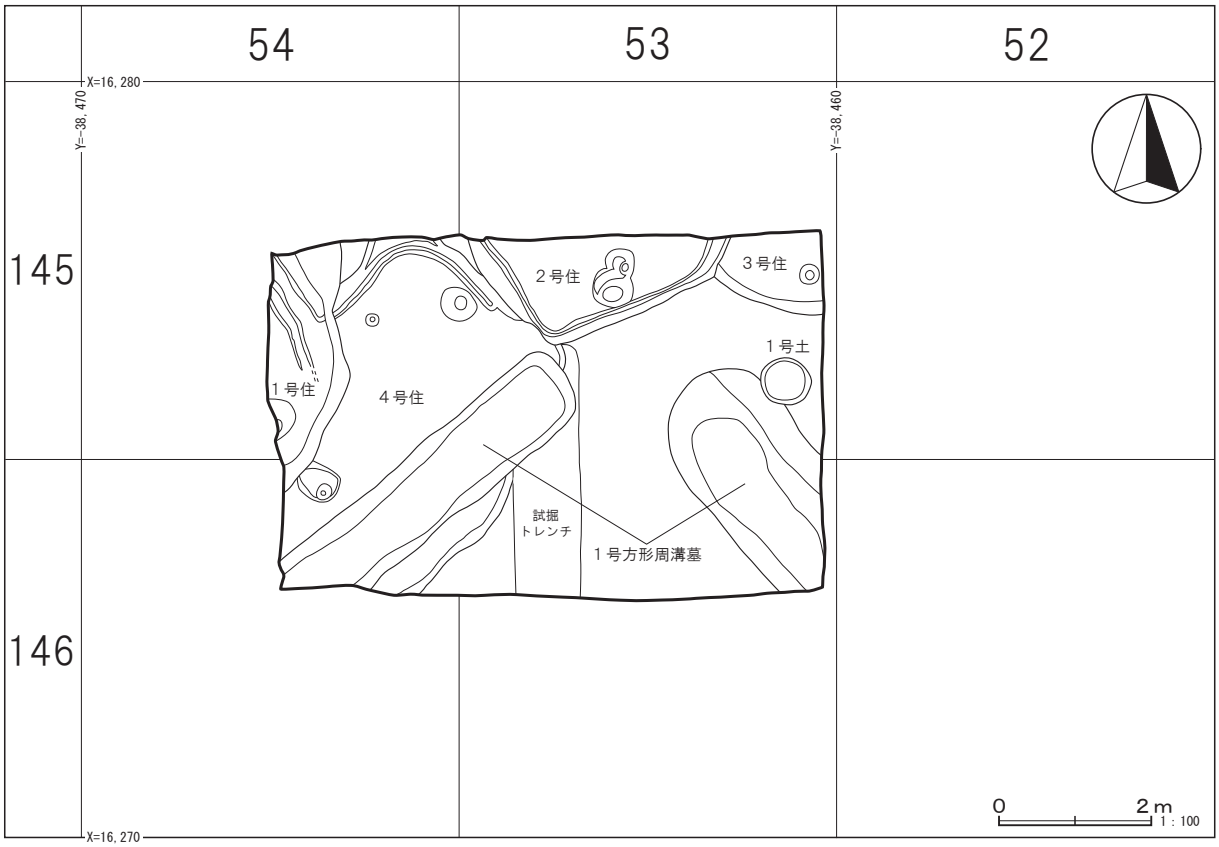
調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行った。手掘り作業終了後は、遺構毎に実測、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。実測作業にあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように日本測地系で設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

今回報告する調査地点のグリッドは、東西が 53・54、南北は 145・146 が該当する。区画整理地内全体のグリッド図については、過去に刊行した本遺跡の報告（熊谷市教育委員会 2002・2003）に記載されていることから本報告では省略した。

２　検出された遺構と遺物

今回報告する調査地点は、遺跡範囲北東部に位置する（第３図）。検出された遺構は、住居跡４軒、方形周溝墓１基、土坑１基である（第４図）。

住居跡は、４軒検出された。１号は調査区北西隅、２号は中央北側、３号は北東隅、４号は西側に位置する。住居跡同士ないし他の遺構と重複しており、また調査区の都合から全形を検出できたものはないが、平面プランは隅丸長方形か方形を呈すると思われる。正確な規模は、すべて不明である。出土遺物は、弥生土器・石器がある。出土量は多くないが、各住居跡からほぼ時期を特定し得る土器



第４図　調査区全測図

が出土した。また、２号では石器が比較的多く出土し、中部高地栗林式土器文化圏の榎田型磨製石斧が出土した。時期は、すべて中期後半に相当するが、重複することから時期差を持つ。

方形周溝墓は、１基検出された。調査区南側に位置し、第４号住居跡を切っている。検出されたのは、東周溝が北側約 1/3、北周溝が東側約 2/3 である。四隅に土橋を持つタイプと思われるが、正確な規模は不明である。方台部にマウンドの痕跡は、確認されなかった。出土遺物は、弥生土器・石器があるが、そのほとんどが流れ込みと思われる。伴う遺物は少ないが、時期は弥生時代後期初頭と思われる。

土坑は、１基検出された。調査区東側中央に位置し、第１号方形周溝墓の東周溝立ち上がりを切っている。平面プランは、円形を呈する。出土遺物は、弥生時代中期後半の土器片が少量出土したが、伴うものではないため、時期は重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降としか言えない。

遺構外出土遺物は、弥生時代中期後半の土器・石器、古墳時代後期以降の須恵器があり、前者の土器が多数出土した。弥生時代中期後半の遺物は、壺、甕、高坏、筒形、打製石斧、磨石がある。古墳時代後期以降の須恵器は、瓶の破片１点のみである。

Ⅳ　遺構と遺物

１　住居跡

第１号住居跡（第５図）

54 － 145・146 グリッドに位置する。東側で第４号住居跡を切っている。南東隅付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。

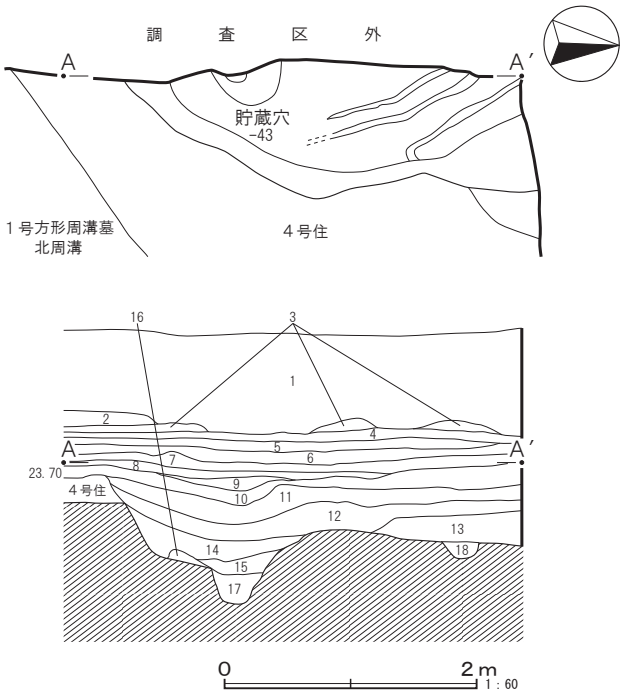
正確な規模は不明であるが、検出された東西は 1.09 m、南北は 3.18 mを測る。平面プランは、隅丸長方形ないし方形を呈すると思われる。主軸方向は、不明である。確認面からの深さは、概ね 0.3 m前後を測るが、調査区境での土層断面観察の結果、確認面より 0.22 m程高い土層から掘り込まれていたことが確認された。床面は凹凸がみられ、南側が北側に比べて低くなっていた。掘り方は、みられなかった。覆土は、壁溝・貯蔵穴も含め８層（11 ～ 18 層）確認された。ほぼ全層に混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、東壁沿いで確認された。幅 0.2 m前後、床面からの深さは 0.13 m程を測る。また、その壁溝から西へ 0.15 m前後離れた床面にも溝が巡ることが確認された。溝の南端は、南壁手前で途切れる。幅・床面からの深さは、東壁溝とほぼ同じである。東壁沿いに併行して巡ることから本住居跡は拡張が行われたと思われる。

南側の調査区境では、貯蔵穴と思われる掘り込みが検出された、正確な径、平面プランは不明であるが、検出された東西は 0.26 m、南北は 0.55 m、床面からの深さは 0.43 mを測る。

炉跡・主柱穴と思われるピットは、調査区の都合から確認されなかった。

出土遺物（第６・７図）は、弥生土器壺（１・６～24）、甕（２～５・25～46）、高坏（47）、筒形（48）、磨石兼敲石（49 ～ 51）、磨石（52・53）がある。すべて覆土からの出土である。土器は、摩耗の著し



土層説明（ＡＡ′）

1 盛　　土
2 オリーブ灰色土：マンガン粒多量、酸化鉄、白色粒少量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、酸化鉄少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
6 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。５層より明るい。
7 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。６層より明るい。
8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
9 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
10 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
11 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
12 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物、マンガン粒少量含む。11 層より明るい。
13 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粒、マンガン粒少量含む。12 層より暗い。
14 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。13 層より暗い。
15 暗灰色粘土：酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。
16 灰白色ブロック
17 灰色粘土：灰白色ブロック少量含む。
18 暗灰色粘土：酸化鉄、灰白色粒多量含む。

第５図　第１号住居跡

いものが大半を占める。

１・６～24は、壺である。１・６・19～21・24は、中部高地の栗林式系である。破片は、判別が難しいが、６・19～21・24以外にも栗林式系があるかもしれない。１は、小型壺の口縁部から頸部までの部位である。短い口縁部が外反しながら立ち上がり、頸部はハの字に下る。外面文様は、口縁端部にＬＲ単節縄文が施文され、頸部はＬＲ単節縄文地に太いヘラ描きの平行線文２条と間に山形文１条が巡る。調整は、口縁部の外面無文部と内面がヘラミガキ、頸部内面はヘラナデである。

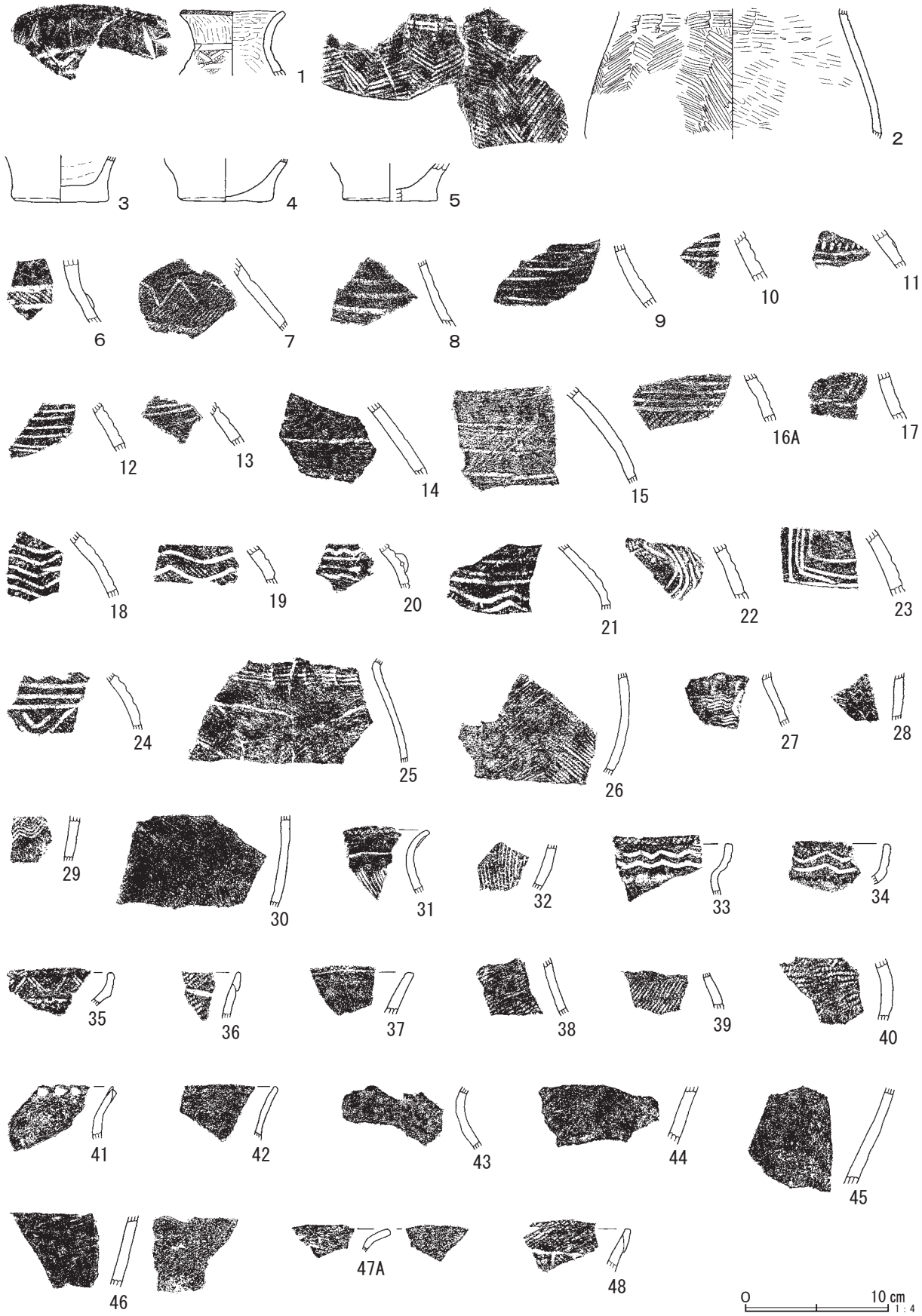
６は、頸部から肩部までの破片である。外面文様は、頸部と肩部の境にＲＬ単節縄文が施文された突帯が１条巡るのみである。頸部と肩部の外面無文部、内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。

７は、外面にヘラで上向きの鋸歯文が描かれた肩部片である。鋸歯文内と下位に設けられた緩い段の間にＬＲ単節縄文が充填されている。調整は、鋸歯文上の外面無文部が斜・縦位のヘラミガキ、内面は、斜・横位のヘラナデである。

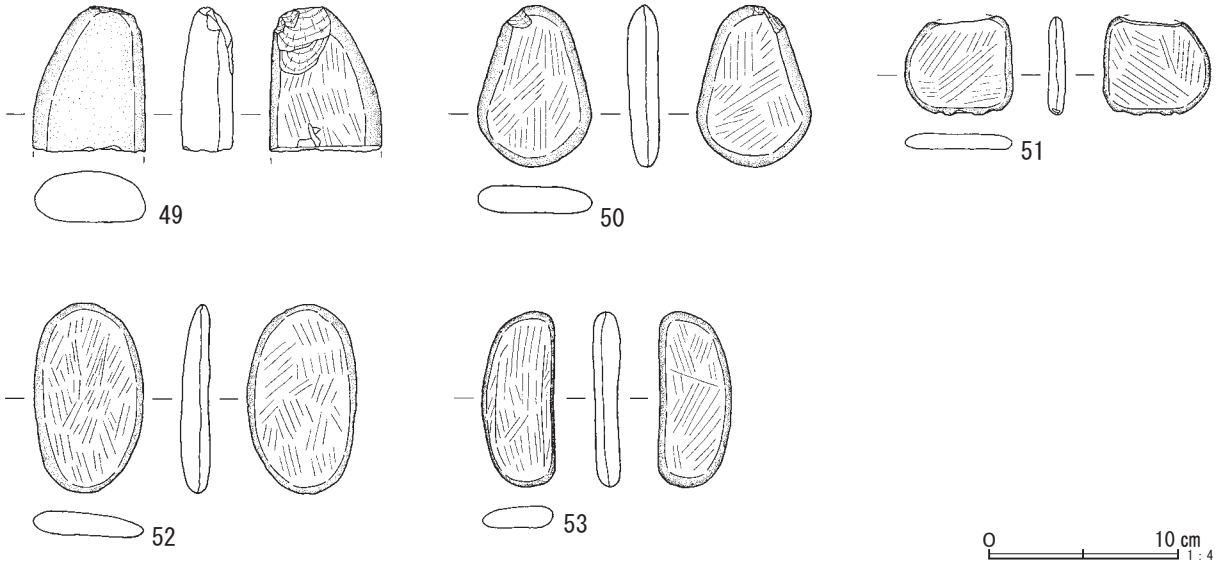
８～16は、外面にヘラ描きの平行線文が複数巡る破片であるが、この中には重四角文になる可能性もある。８～14は肩部、15・16は胴上部の破片である。８は、やや太い平行線文が間隔を空けて３条巡る。９は、平行線文が５条巡る。10は、上位に平行線文が３条巡り、下位にＬＲ単節縄文が施文されている。11は、緩い段下に爪形の刺突列１列と平行線文が２条巡る。12は、平行線文が６条巡る。13は、上位に平行線文が３条巡り、下位にＬＲ単節縄文と思われる縄文が施文されている。14は、摩耗が著しいため分かりづらいが、間隔を空けて上位と中段に平行線文が巡り、間にＬＲ単節縄文か無節Ｌが充填されている。15は、摩耗が著しいため定かではないが、中段から下位にやや太い平行線文が間隔を空けて巡る。地文にＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文されている。16は、上位にやや太い平行線文が４条巡り、下位にＬＲ単節縄文と赤彩が施文されているが、赤彩は大半が剥落している。調整は、９の平行線文間の外面無文部は摩耗が著しいため全面を確認できていないが、一部で斜位のハケメが確認された。内面は、横位のヘラナデである。12の平行線文間の外面無文部は、横・斜位のヘラミガキである。８の平行線文間の外面無文部と内面、10・11・13～16の内面は、摩耗が著しいため不明である。８・13・14は、胎土がやや粗い。15は、胎土に黒色粒を多量含む。

17～19は、外面にヘラ描きの波状文が横位に巡る破片である。17は肩部、18・19は胴上部の破片である。17は、摩耗が著しいため分かりづらいが、中段にやや太い波状文が１条巡り、上位にＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文されている。下位は、無文である。18は、やや太い波状文６条が密に巡る。摩耗が著しいため定かではないが、地文にＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文されている可能性がある。19は、ＲＬ単節縄文地に太い波状文が２条巡る。調整は、17の外面無文部と内面は摩耗が著しいため不明、18・19の内面は横位のヘラナデである。19は、胎土がやや粗い。

20・21は、外面にヘラ描きの平行線文と横位の波状文が巡る胴上部片である。20は、上下に波状文が１条、間に平行線文が２条巡る。側面に焼成前穿孔が１つ施されたやや縦長の短い突起が付く。21は、上位にやや太いヘラ描きの平行線文が３条、下位に波状文が２条巡る。摩耗が著しいため定かではないが、地文に縄文が施文されている可能性がある。内面調整は、いずれも横位のヘラナデである。21は、図示しなかったが、内面中段付近に輪積痕がみられた。20は、胎土がやや粗い。21は、胎土に赤色粒を多量含む。



第６図　第１号住居跡出土遺物（１）



第７図　第１号住居跡出土遺物（２）

22 は、外面にヘラでフラスコ文が描かれた胴上部片である。フラスコ文内にＬＲ単節縄文が充填されている。内面調整は、斜位のヘラナデである。

23 は、外面にヘラで重四角文が描かれた胴上部片である。摩耗が著しいため、区画内ないし地文に縄文が施文されているか不明である。内面調整は、横位のヘラナデである。

24 は、外面にやや太いヘラで重三角文が描かれた胴上部片である。重三角文上位に波状文が１条巡り、地文にＲＬ単節縄文が施文されている可能性がある。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

２～５・25 ～ 46 は、甕である。２・25 ～ 30・33 ～ 35 は、中部高地の栗林式系である。２は、頸部から胴部中段付近までの部位である。頸部から胴部中段付近まで緩やかに膨らみながら下る。外面文様は、頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴部は縦位の羽状文が密に描かれている。櫛歯の単位は、簾状文が４本、羽状文が５本である。調整は、外面がハケメ、内面はヘラミガキである。頸部内面に小さい輪積痕が一部残る。３～５は、底部である。甕としたが、壺の可能性もある。いずれも円柱状を呈する。４は、器壁が薄い。調整は、３の内面がヘラナデ、その他は摩耗が著しいため不明である。５は、胎土が粗く、礫を多量含む。

25 ～ 32 は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。25・26 は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。25 は頸部から胴上部まで、26 は胴部中段付近の破片である。櫛歯の数は、いずれも４本である。羽状文以外の外面文様は、25 の頸部に同一工具による簾状文が巡る。調整は、25 の外面が横位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキであるが、所々にヘラミガキ前に施された横・斜位のハケメが残る。26 の内面は、横・斜位のヘラミガキである。25 は、胎土がやや粗い。

27 ～ 29 は、胴部外面に波状文が横位に巡る破片である。27 は頸部から胴上部まで、28 は胴部中段付近、29 は胴下部の破片である。櫛歯の数は、27 が５本、28 が４本、29 は３本である。波状文以外の外面文様は、27 の頸部に同一工具による簾状文が巡る。27 の胴部の波状文は、横位に巡るもの以外に垂下するものもみられた。29 は、上位に波状文が複数巡り、下位は無文である。調整は、27 の内面、29 の外面無文部と内面は摩耗が著しいため不明、28 の内面は横・斜位のヘラナデである。27 は、胎土がやや粗い。

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	(7.4)	(4.55)	－	ABDEHIKN	外:暗灰黄　内:にぶい黄	B	口～頸30%	内外面大半摩耗顕著。
2	弥生土器　甕	－	(9.15)	－	ABCIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	頸～胴40%	内外面大半摩耗顕著。頸部内面輪積痕有。
3	弥生土器　甕	－	(3.3)	6.8	ABDEIKN	外:橙　内:黒褐	B	底部100%	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器　甕	－	(3.0)	(6.6)	ABDEHIKN	外:浅黄橙　内:黒褐	B	底部30%	内外面摩耗顕著。
5	弥生土器　甕	－	(2.7)	(6.6)	ABHN	外:にぶい褐　内:灰黄褐	B	底部30%	内外面摩耗顕著。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIK	外:灰白　内:にぶい黄橙	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
7	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:灰黄褐　内:黒	B	肩部片	内外面やや摩耗。
8	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
10	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIK	浅黄橙色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
11	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	褐灰色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
12	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIN	外:灰黄褐　内:褐灰	B	肩部片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
13	弥生土器　壺	－	－	－	ABIKN	外:にぶい褐　内:褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
14	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:灰黄褐　内:黒褐	B	肩部片	内外面摩耗、内面剥離顕著。
15	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEIN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴上部片	内面剥離、外面摩耗顕著。
16	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEHIKN	外:灰褐　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。外面縄文施文部赤彩、大半剥落。
17	弥生土器　壺	－	－	－	AHIKN	黒褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
18	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:灰　内:オリーブ黒	B	胴上部片	内面やや摩耗、外面摩耗顕著。
19	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:橙　内:灰黄	B	胴上部片	
20	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIN	外:黒　内:黒褐	B	胴上部片	
21	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴上部片	内面やや摩耗、外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
22	弥生土器　壺	－	－	－	ABHKN	明赤褐色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
23	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
24	弥生土器　壺	－	－	－	ABIKN	外:灰黄褐　内:暗灰黄	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
25	弥生土器　甕	－	－	－	ABCEHIN	にぶい橙　褐灰	B	頸～胴上片	内外面大半摩耗顕著。
26	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴中段片	内外面大半摩耗顕著。
27	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
28	弥生土器　甕	－	－	－	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
29	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIN	外:褐灰　内:灰黄褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
30	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	外:オリーブ黒　内:にぶい黄橙	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
31	弥生土器　甕	－	－	－	AHIK	黒褐色	B	口～胴上片	
32	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHI	外:褐灰　内:黒褐	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
33	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
34	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
35	弥生土器　甕	－	－	－	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	外面やや摩耗。
36	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	外:黒褐　内:にぶい黄褐	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
37	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIK	外:灰白　内:にぶい黄橙	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
38	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
39	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
40	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや摩耗。
41	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIK	外:灰黄褐　内:褐灰	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
42	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIK	外:黒褐　内:にぶい黄褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
43	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIK	外:褐灰　内:灰黄褐	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
44	弥生土器　甕	－	－	－	ABCEHIKN	外:橙　内:明赤褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
45	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:黒　内:褐灰	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
46	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:黒　内:灰黄褐	B	胴下部片	内面やや摩耗。
47	弥生土器　高坏	－	－	－	ABDHIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
48	弥生土器　筒形	－	－	－	ABDHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
49	磨石・敲石	最大長(7.6)cm、最大幅(5.85)cm、最大厚(2.7)cm。重量(162.5)g。約半分欠。砂岩。							
50	磨石・敲石	最大長8.5cm、最大幅6.0cm、最大厚1.65cm。重量102.6g。完形。砂岩。							
51	磨石・敲石	最大長(4.95)cm、最大幅5.6cm、最大厚0.85cm。重量(39.9)g。片側面欠。砂岩。							
52	磨　石	最大長9.95cm、最大幅5.8cm、最大厚1.5cm。重量98.7g。完形。砂岩。							
53	磨　石	最大長9.25cm、最大幅3.75cm、最大厚1.4cm。重量66.5g。完形。砂岩。							

30は、分かりづらいが、外面に斜格子文が描かれた胴部中段付近の破片である。櫛歯の数と内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

31・32は、胴部外面に斜線文ないし縦線文が描かれた破片である。31は肥厚する口縁部から胴上部まで、32は胴下部の破片である。31に斜線文、32に縦線文が描かれている。櫛歯の数は、31が不明、32は６本である。その他の文様は、31の口縁端部にＲＬ単節縄文が施文されている。調整は、31の口縁部から頸部までの外面無文部が横ナデ、内面は横位のヘラミガキである。32の内面は、摩耗が著し

いため不明である。

33 ～ 35 は、口縁部外面に波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。すべて受け口状を呈する口縁部から頸部までの破片である。33・34 は、ヘラ描きの波状文が２条、35 は２本一単位の櫛歯状工具による山形文が１条巡る。いずれも口縁端部に縄文が施文されている。縄文は 33・35 がＬＲ、34 はＲＬ単節縄文である。35 は、口縁部外面にも地文にＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、34 の頸部外面無文部と内面は摩耗が著しいため不明、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、頸部外面無文部が横位、内面は横・斜位に施されている。

36 ～ 40 は、外面にＬＲ単節縄文が施文された破片である。36 は口縁部から頸部まで、37 は口縁部、38・39 は頸部から胴上部まで、40 は胴部中段付近の破片である。縄文は、36 が肥厚する口縁部から頸部まで、37 は口縁端部、38・40 は外面全面、39 は頸部の無文部以下に施文されている。調整は、36・38・39 の内面、37 の内外面は摩耗が著しいため不明、39 の頸部外面無文部は横位のヘラミガキ、40 の内面は横・斜位のヘラナデである。37 は、胎土が密である。

41 ～ 46 は、ほぼ無文の破片である。41・42 は口縁部から頸部まで、43 は頸部から胴上部まで、44 ～ 46 は胴下部の破片である。46 は、甕としたが、壺の可能性もある。41 は、口縁端部に指頭圧痕が施されている。調整は、41 ～ 44 の内外面、45 の内面は摩耗が著しいため不明、45・46 の外面は斜位のヘラミガキであるが、46 の外面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残る。46 の内面は、斜位のハケメである。

47 は、高坏の口縁部片である。無文である。調整は、摩耗が著しいため内外面ともに不明である。内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

48 は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。口縁端部を含む外面全面にＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文され、頸部はヘラ描きの沈線が垂下する。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

49 ～ 53 は磨石であるが、49 ～ 51 は敲石を兼ねる。石材は、すべて砂岩である。49 は約半分、51 は片側面を欠くが、その他は完形である。49 のみ厚手、その他は扁平である。

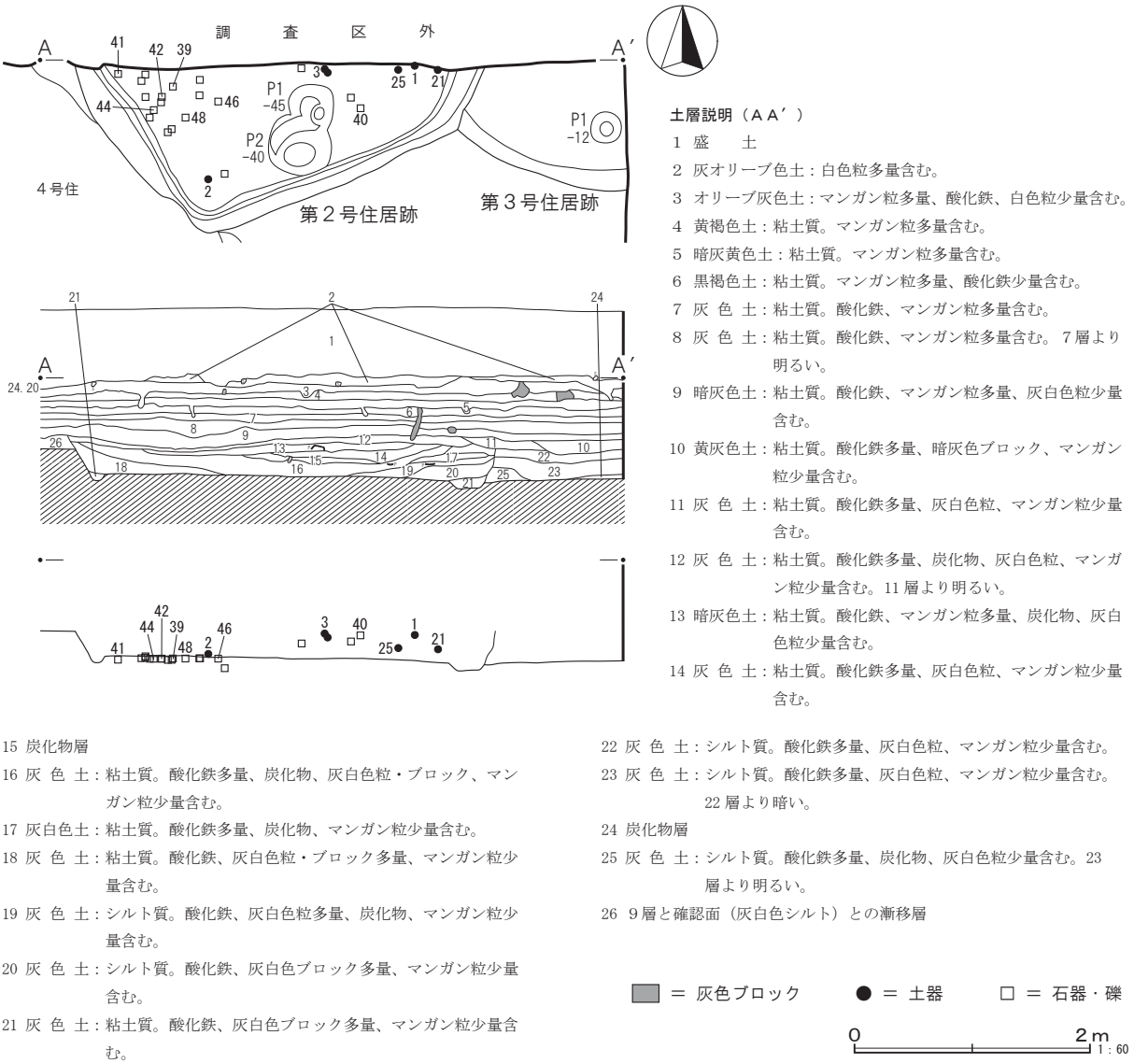
本住居跡の時期は、第４号住居跡より新しい弥生時代中期後半と思われる。

第２号住居跡（第８図）

53 － 145 グリッドに位置する。南西隅付近で第４号住居跡、南東隅で第３号住居跡を切っている。南側半分程の検出であり、北側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は 3.01 ｍ、南北は 1.67 ｍを測る。平面プランは、隅丸長方形ないし方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－ 23°－Ｗを指す。確認面からの深さは、概ね 0.25 ｍ前後を測るが、調査区境での土層断面観察の結果、確認面より 0.12 ｍ程高い土層から掘り込まれていたことが確認された。床面は、概ね平坦であったが、西から東へやや傾斜していた。掘り方は、みられなかった。覆土は、10 層（12 ～ 21 層）確認された。全層に混入物がみられ、炭化物層やブロックを多量含む層もみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、検出された範囲内を全周する。幅は概ね 0.2 ｍ前後を測るが、南東及び南西隅付近では 0.1 ｍ前後を測る狭い箇所がみられた。床面からの深さは、0.05 ～ 0.09 ｍを測る。



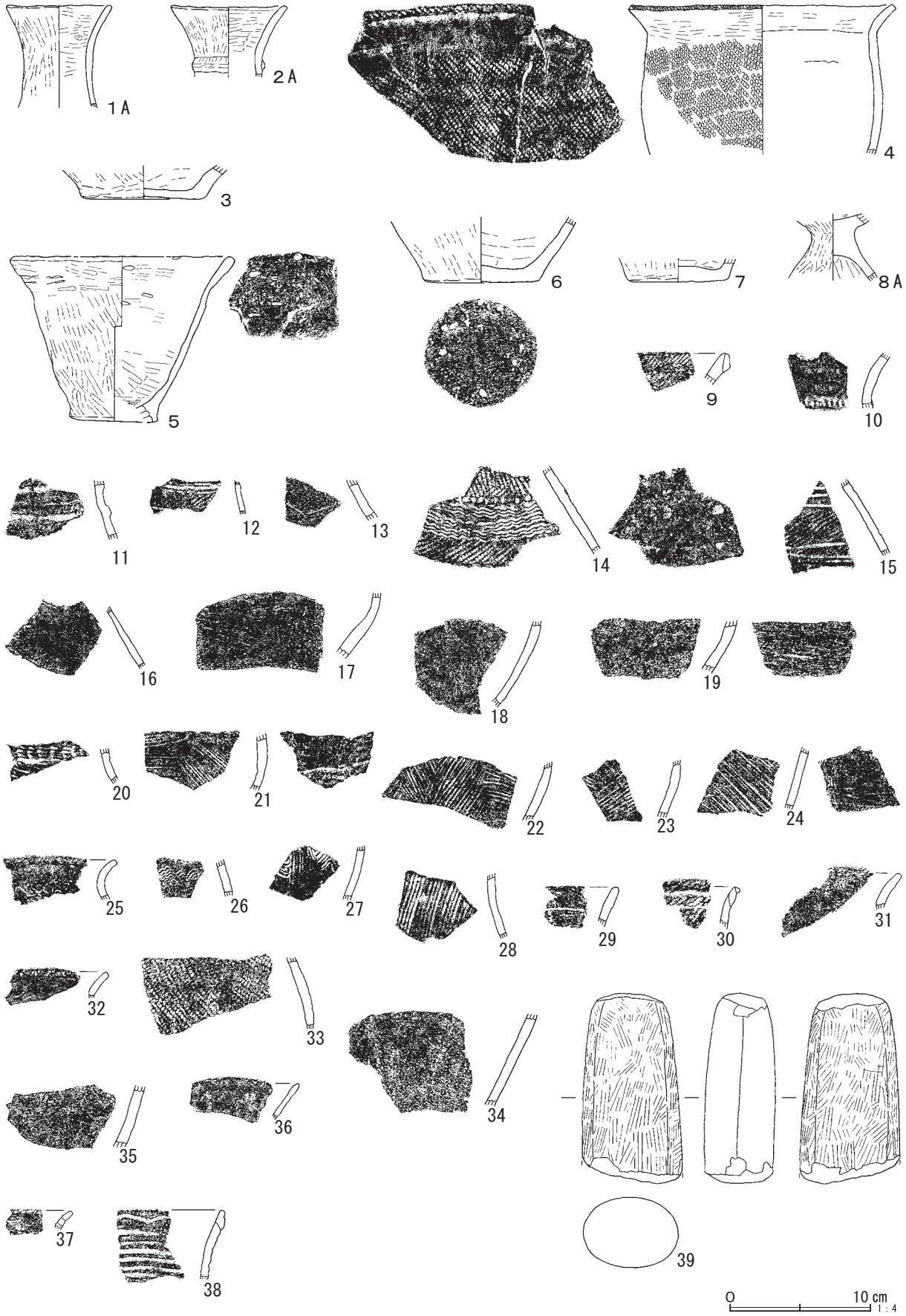
第８図　第２・３号住居跡

ピットは、２基検出された。いずれも南壁沿いの床面ほぼ中央に位置し、南北に並んで重複していた。その位置から出入口に関連すると思われる。両者の新旧関係は不明であるが、いずれも覆土は粘土質の灰色土で酸化鉄や炭化物、灰白色粒を多量含んでいた。

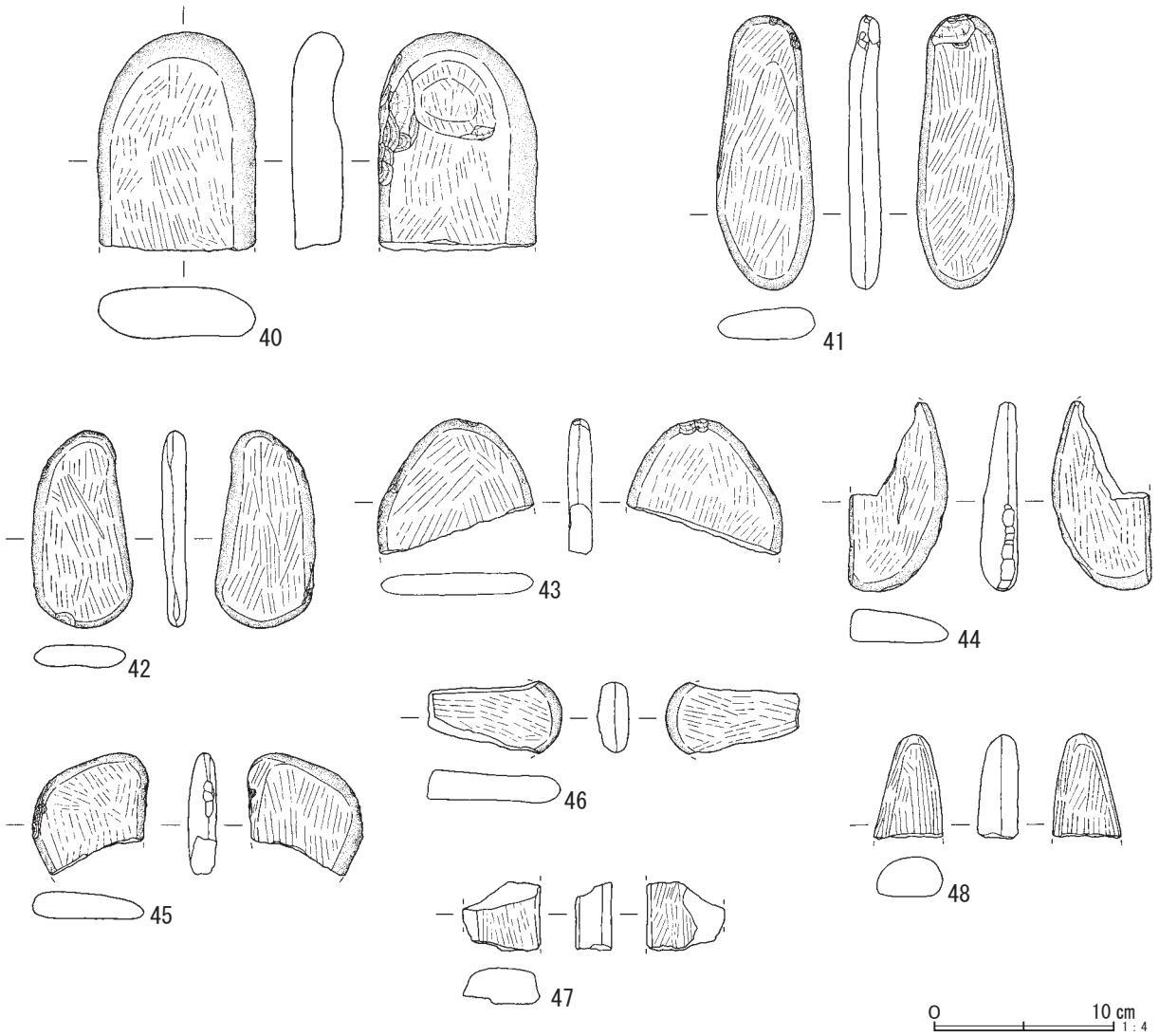
炉跡・主柱穴と思われるピットは、調査区の都合から確認されなかった。

出土遺物（第９・10 図）は、弥生土器壺（１～３・９～19）、甕（４～７・20 ～ 35）、高坏（８・36・37）、筒形（38）、磨製石斧（39）、磨石兼凹石（40）、磨石兼敲石（41 ～ 45）、磨石（46 ～ 48）がある。出土位置を図示した遺物は、ほぼ全面に点在するが、石器は西側からの出土が多い。出土位置を図示した遺物以外は、覆土からの出土である。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

１～３・９～ 19 は、壺である。１・２は、中部高地の栗林式系である。破片は、判別の難しいものがあるが、11・16 は栗林式系と思われる。１・２は、口縁部から頸部までの部位である。いずれも口縁部が逆ハの字に開き、すぼまる頸部はほぼ直立する。１の頸部は長く、２は短い。１は無文、２は頸部にやや幅広の突帯が１条巡る。調整は、いずれも内外面ともにヘラミガキであり、赤彩が施され



第９図　第２号住居跡出土遺物（１）



第10図　第２号住居跡出土遺物（２）

ているが、１は内面が大半、外面はほぼ、２は内外面ほぼ剥落している。３は、底部である。やや上げ底で中央付近の器壁が薄い。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。外面に輪積痕が一部みられた。壺としたが、甕の可能性もある。

９は、口縁部片である。肥厚した口縁部にＬＲ単節縄文が施文され、下位は無文である。外面下位の無文部と内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。胎土がやや粗い。

10・11 は、外面に突帯が巡る破片である。10 は口縁部下位から頸部まで、11 は頸部から肩部までの破片である。10 は、頸部に爪形の刺突列が刻まれた低い突帯が１条巡る。口縁部下位は、無文である。11 は、ＬＲ単節縄文が施文された凸形を呈する突帯がやや間隔を空けて２条巡る。突帯間と突帯下位は、無文である。外面無文部と内面の調整は、いずれも摩耗が著しいため不明である。

12 は、外面にヘラ描きの平行線文が巡る頸部から肩部までの破片である。上下に平行線文が巡り、間にＬＲ単節縄文が充填されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。器壁が薄い。

13・14 は、外面に櫛歯状工具による山形文ないし波状文が横位に巡る肩部片である。櫛歯の数は、いずれも３本である。13 は、分かりづらいが、下位に山形文が１段巡り、山形文上位は無文である。

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	7.5	(7.35)	－	ABCDIKN	浅黄橙　灰黄褐	B	口～頸90%	内外面摩耗。内外面赤彩、内面大半、外面ほぼ剥落。
2	弥生土器　壺	8.3	(5.15)	－	ABDHIK	灰黄色	B	口～頸90%	内面大半、外面全面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
3	弥生土器　壺	－	(2.4)	8.9	ABDEHIKN	外:灰白　内:灰黄褐	B	底部70%	内外面摩耗顕著。外面輪積痕有。
4	弥生土器　甕	(19.0)	(15.65)	－	ABDEIKN	黒褐色	B	口～胴20%	33同一個体。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
5	弥生土器　甕	(16.0)	11.85	(6.2)	ABDEKN	外:にぶい橙　内:浅黄橙	B	40%	内外面摩耗・剥離。外面輪積痕、内面イネ圧痕・凹み有。
6	弥生土器　甕	－	(4.7)	8.2	ABDIKN	外:褐灰　内:黒褐	B	胴～底70%	内外面摩耗顕著。底面楕円形凹み複数有。
7	弥生土器　甕	－	(1.7)	7.1	ABCDHIKN	外:にぶい褐　内:黒	B	底部55%	外面摩耗顕著。
8	弥生土器　高坏	－	(4.75)	－	ABDEIKN	灰黄褐色	B	接～脚80%	内外面大半摩耗。坏部内面、外面全面赤彩、ほぼ剥落。
9	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEHIKN	外:にぶい黄褐　内:灰黄褐	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
10	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEHIK	外:にぶい黄橙　内:浅黄橙	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
11	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHIKN	外:浅黄橙　内:褐灰	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
12	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDIK	外:にぶい橙　内:にぶい黄橙	B	頸～肩部片	
13	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:オリーブ黒	B	肩部片	外面やや摩耗。
14	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHIK	外:暗灰黄　内:にぶい黄橙	B	肩部片	内面輪積痕有。
15	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
16	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHIKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	肩～胴上片	内外面摩耗顕著。
17	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:灰黄褐　内:黄灰	B	胴下部片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
18	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴下部片	
20	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
21	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	暗褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
22	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:オリーブ黒　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
23	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	内外面やや摩耗。
24	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:オリーブ黒　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	
25	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	黒褐色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
26	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:暗褐　内:にぶい褐	B	頸～胴上片	外面下位摩耗顕著。
27	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	
28	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:暗褐　内:にぶい黄褐	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
29	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	にぶい褐色	B	口縁部片	
30	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	口～頸部片	外面やや摩耗。
31	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄　内:灰黄褐	B	口～頸部片	内外面やや摩耗。
32	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
33	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	4同一個体。内外面摩耗顕著。
34	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:明黄褐　内:褐灰	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
35	弥生土器　甕	－	－	－	ACDHK	外:にぶい黄橙　内:黄灰	B	胴下部片	外面大半摩耗顕著。
36	弥生土器　高坏	－	－	－	ABCHIN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器　高坏	－	－	－	ABCHK	外:にぶい橙　内:褐灰	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。焼成前穿孔有。
38	弥生土器　筒形	－	－	－	AHIKN	外:黒褐　内:にぶい黄褐	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
39	磨製石斧	最大長(13.35)cm、最大幅(7.1)cm、最大厚5.0cm。重量(903.5)g。刃部欠。緑色岩。							
40	磨石・凹石	最大長(12.15)cm、最大幅8.85cm、最大厚2.85cm。重量(520.0)g。片端欠。砂岩。							
41	磨石・敲石	最大長15.25cm、最大幅5.4cm、最大厚1.75cm。重量(198.5)g。ほぼ完形。砂岩。							
42	磨石・敲石	最大長10.95cm、最大幅5.4cm、最大厚1.3cm。重量(98.5)g。ほぼ完形。砂岩。							
43	磨石・敲石	最大長(6.3)cm、最大幅(8.45)cm、最大厚(1.3)cm。重量(94.0)g。約半分残。砂岩。							
44	磨石・敲石	最大長(9.1)cm、最大幅5.4cm、最大厚2.1cm。重量(98.0)g。約2/3残。砂岩。							
45	磨石・敲石	最大長(5.4)cm、最大幅6.2cm、最大厚1.55cm。重量(74.5)g。約2/3残。砂岩。							
46	磨　石	最大長(3.95)cm、最大幅(7.45)cm、最大厚(1.65)cm。重量(57.0)g。大半欠。砂岩。							
47	磨　石	最大長(3.8)cm、最大幅(4.3)cm、最大厚(2.1)cm。重量(45.0)g。大半欠。砂岩。							
48	磨　石	最大長(5.7)cm、最大幅(3.8)cm、最大厚(2.25)cm。重量(68.5)g。片端付近残。凝灰岩。							

14 は、半円形の刺突列が刻まれた緩い段下位に波状文が３段巡り、段上位と波状文下位はＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、13 の山形文上位の外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。14 の内面は、横・斜位のヘラナデである。14 は、内面下位に輪積痕がみられた。

15 は、外面下位にヘラで重四角文が描かれた胴上部片である。重四角文上位は、ヘラ描きの平行線文が３条巡る。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。

16 ～ 19 は、無文の破片である。16 は肩部から胴上部まで、17 ～ 19 は胴下部の破片である。調整は、16・18 は内外面ともに摩耗が著しいため不明、17・19 は外面がヘラミガキで 17 の上位は横位、下位は横・斜位、19 は横・斜位に施されている。内面は、いずれも横・斜位のヘラナデであるが、19 はヘラナデ

前に施された横・斜位のハケメが所々に残る。17 は、胎土に白色粒を多量含む。

４～７・20 ～ 35 は、甕である。20 ～ 27 は、中部高地の栗林式系である。４は、口縁部から胴部中段付近までの部位である。最大径を持つ短い口縁部が逆ハの字に開き、すぼまる頸部はほぼ直立する。胴部の膨らみは、小さい。外面文様は、口縁端部と胴部全面に縄目の大きいＲＬ単節縄文が施文されている。口縁部から頸部までの外面は、無文である。調整は、口縁部から頸部までの内外面がヘラミガキ、胴部内面は摩耗が著しいため不明である。胴上部内面に輪積痕が一部みられた。胎土に白色粒を多量含む。33 と同一個体である。５は、底部中央付近を欠くが、全形の分かる小型の無文甕である。器形は、やや縦長の逆台形状を呈するが、頸部がすぼまる。肥厚する口縁部に最大径を持つ。調整は、外面全面と口縁部から胴下部までの内面はヘラミガキであるが、底部内面はハケメである。口縁部外面に輪積痕、口縁部から頸部までの内面にイネの圧痕と長方形状の凹みが複数みられた。６・７は、胴下部から底部までに収まる部位である。甕としたが、壺の可能性もある。いずれも底部が円柱状を呈し、器壁が厚い。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。６は、底面に楕円形のやや浅い凹みが複数みられた。

20 ～ 24 は、胴部外面に櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれた破片である。20 は頸部から胴上部まで、21 は胴部中段付近、22 ～ 24 は胴下部の破片である。櫛歯の単位は、20・22・23 が５本、21 は６本、24 は４本である。羽状文以外の外面文様は、20 の頸部に同一工具による簾状文が巡る。内面調整は、20・21・22 は摩耗が著しいため不明、23 は横位のヘラナデ、24 は斜位のハケメである。21 は、内面に輪積痕が残る。

25 ～ 27 は、胴部外面に櫛歯状工具による波状文が横位に巡る破片である。25 は口縁部から頸部まで、26 は頸部から胴上部まで、27 は胴下部の破片である。櫛歯の単位は、25 が不明、26 は４本、27 は５本である。波状文以外の外面文様は、25 が口縁端部にＬＲ単節縄文が施文され、26 は頸部に同一工具による簾状文が巡る。27 は、同一工具による縦線文脇に波状文が巡る。25 の口縁部外面、27 の外面文様下位は、無文である。調整は、25 の口縁部外面と内面全面が横位のヘラミガキ、26 の内面は斜位のヘラナデ、27 の外面無文部は縦位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。

28 は、櫛歯状工具による斜線文が描かれた頸部から胴上部までの破片である。櫛歯の単位は、５本である。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

29 は、外面にヘラ描きの細い平行線文が１条巡る口縁部片である。調整は、外面が横ナデ、内面は横位のヘラミガキである。甕としたが、他器種の可能性がある。

30 ～ 33 は、外面に縄文が施文された破片である。30 ～ 32 は口縁部から頸部まで、33 は胴上部の破片である。33 は、４と同一個体である。縄文は、30・31 がＬＲ、32・33 はＲＬ単節縄文であり、30 は口縁端部を含む外面全面、31・32 は口縁端部、33 は外面全面に施文されている。調整は、33 の内面は摩耗が著しいため不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、30 の口縁部内面が横位、頸部内面は斜位、31 は口縁部外面が横位、頸部外面は斜位、内面は横・斜位、32 は内外面ともに横・斜位に施されている。

34・35 は、無文の胴下部片である。調整は、34 の外面は摩耗が著しいため不明、内面は横・斜位のヘラナデ、35 は外面が斜位のヘラミガキ、内面は斜位のヘラナデである。35 は、胎土に白色粒を多量

含む。甕としたが、壺の可能性もある。

８・36・37 は、高坏である。８は、接合部から脚部上位までの部位である。調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。外面全面と坏部内面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。36・37 は、口縁部片である。いずれも器壁が薄い。調整は、いずれも摩耗が著しいため不明である。37 は、焼成前穿孔がみられた。36 は、高坏としたが、他器種の可能性もある。

38 は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。外面文様は、口縁部にやや太いヘラ描きの山形文が１条、頸部に平行線文が７条巡る。平行線文は、重四角文の可能性もある。地文にカナムグラによる擬縄文が施文されている。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。胎土に白雲母を多量含む。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

39 ～ 48 は、石器である。39 は、中部高地栗林式の榎田型磨製石斧である。刃部を欠く。石材は、緑色岩である。片面は、敲打痕が顕著である。40 ～ 48 は、磨石であるが、40 は凹石、41 ～ 45 は敲石を兼ねる。石材は、48 のみ凝灰岩、その他は砂岩である。41・42 はほぼ完形であるが、その他は欠損している。40 は厚手、48 は棒状を呈するが、その他は扁平である。

本住居跡の時期は、第３・４号住居跡より新しい弥生時代中期後半と思われる。

第３号住居跡（第８図）

53 － 145 グリッドに位置する。西側を第２号住居跡に切られている。南西隅付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。

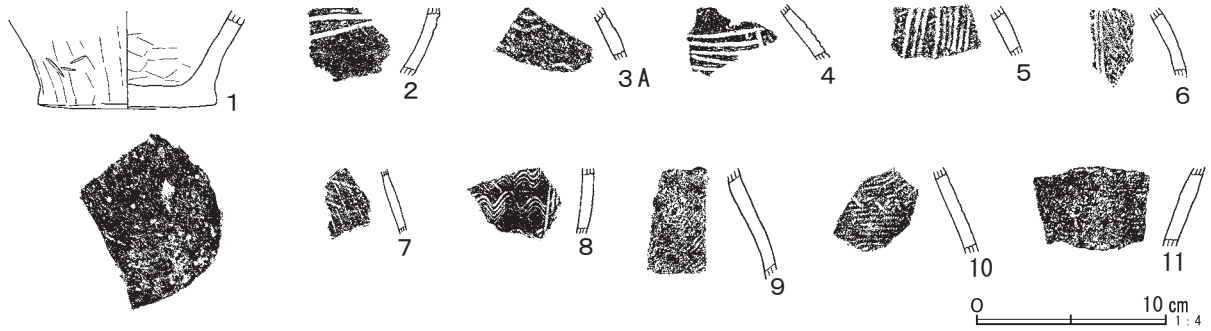
正確な規模は不明であるが、検出された東西は 1.43 m、南北は 1.12 mを測る。平面プランは、隅丸長方形ないし方形を呈すると思われる。主軸方向は、不明である。確認面からの深さは、0.26 m前後を測る。床面は、概ね平坦であったが、東から西へやや傾斜していた。掘り方は、みられなかった。覆土は、４層（22 ～ 25 層）確認された。調査区北東隅付近の床面直上では、炭化物層（24 層）が薄く堆積していた。24 層以外の層は、混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは、１基のみ確認された。その位置から主柱穴ではないと思われる。本住居跡に伴わない可能性もある。

壁溝は、検出された範囲内では確認されなかった。また、炉跡や主柱穴と思われるピットも調査区の都合から確認されなかった。

出土遺物（第 11 図）は少ないが、弥生土器壺（２～６）、甕（１・７～ 11）がある。すべて覆土からの出土である。土器は、摩耗の著しいものが大半を占める。

２～６は、壺である。２は、外面上位にヘラ描きの平行線文が巡る胴下部片である。平行線文は２条巡るが、下位の沈線は傾いている。平行線文下位は、無文である。調整は、外面下位の無文部が横位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。３は、外面にヘラ描きの波状文が横位に巡る胴上部片である。波状文は、上位に２条、下位に１条巡り、間にＲＬ単節縄文が充填されている。外面の縄文施文部に赤彩が施されているが、大半が剥落している。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。４～６は、外面に重四角文が描かれた胴上部片である。重四角文は、４・５がヘラ、６は単位不明の櫛歯状工具で描かれている。４は、外面下位に重四角文が描かれており、上位は無文である。



第11図　第３号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　甕	－	(5.15)	(9.4)	ABDEHIKN	外:褐灰　内:にぶい黄橙	B	胴～底40%	内外面摩耗顕著。底面楕円形･円形凹み複数有。
2	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:灰褐　内:黒褐	B	胴下部片	内面やや摩耗。
3	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:灰褐　内:黒褐	B	胴上部片	外面縄文施文部赤彩､大半剥落。
4	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:灰黄　内:灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい橙　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:赤褐　内:黒褐	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
7	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	外:にぶい黄褐　内:浅黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
8	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:褐灰　内:灰黄	B	胴中段片	内面大半摩耗顕著。
9	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	外:灰黄褐　内:黒褐	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。
10	弥生土器　甕	－	－	－	ABHKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	外面やや摩耗。
11	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:褐灰　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。

５は、地文にＬＲ単節縄文が施文されており、６は無節Ｒが施文されている。調整は、４の外面上位の無文部が横位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明である。５・６の内面は、横位のヘラナデである。

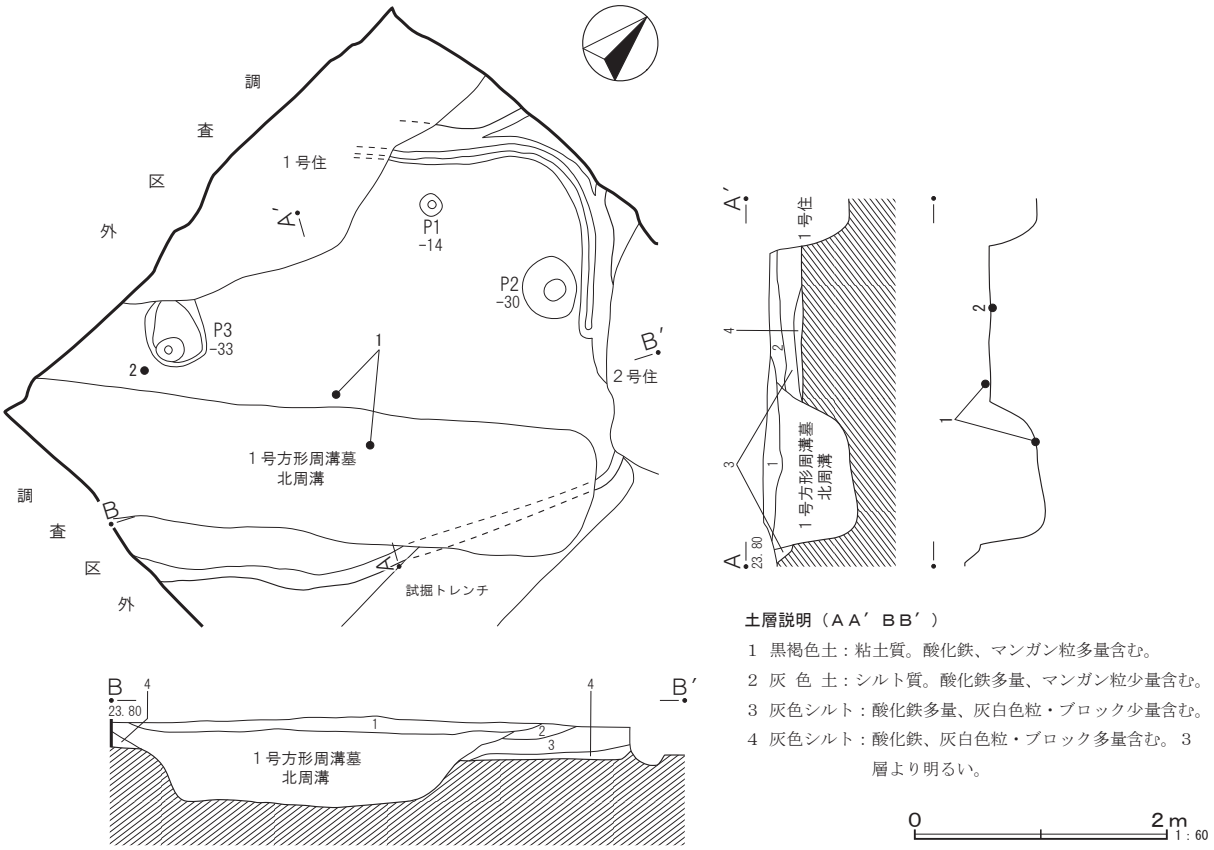
１・７～11は、甕である。１は、胴下部から底部までの部位である。底部は、円柱状を呈する。器壁が厚い。調整は、内外面ともにヘラナデである。底面に楕円形ないし円形の凹みが複数みられた。７・８は、胴部外面に櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の破片である。７は胴上部、８は胴部中段付近の破片である。櫛歯の単位は、７が不明、８は５本である。外面文様は、７が煩雑な縦位の羽状文が描かれており、８は、縦線文脇に波状文がやや間隔を空けて横位に複数巡る。調整は、７の内面は摩耗が著しいため不明、８は波状文間の外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。７は、器壁が薄い。９・10は、外面にＬＲ単節縄文が施文された破片である。９は頸部から胴上部まで、10は胴上部の破片である。縄文は、いずれも外面全面に施文されており、10は中段付近に３本一単位の櫛歯状工具による斜位の刺突が等間隔に施されている。内面調整は、９が横位のヘラナデ、10は横・斜位のヘラミガキである。11は、無文の胴下部片である。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。甕としたが、壺の可能性もある。

本住居跡の時期は、第２号住居跡より古い弥生時代中期後半と思われる。

第４号住居跡（第12図）

53・54－145・146グリッドに位置する。北西部を第１号住居跡、南側を第１号方形周溝墓の北周溝に切られている。西側は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は4.57ｍ、南北は推定3.75ｍ程を測る。平面プランは、横長の隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－41°－Ｗを指す。確認面からの深さは、0.25ｍ前後を測る。床面は、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、４層（１～４層）



第12図　第４号住居跡

確認された。全層に混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

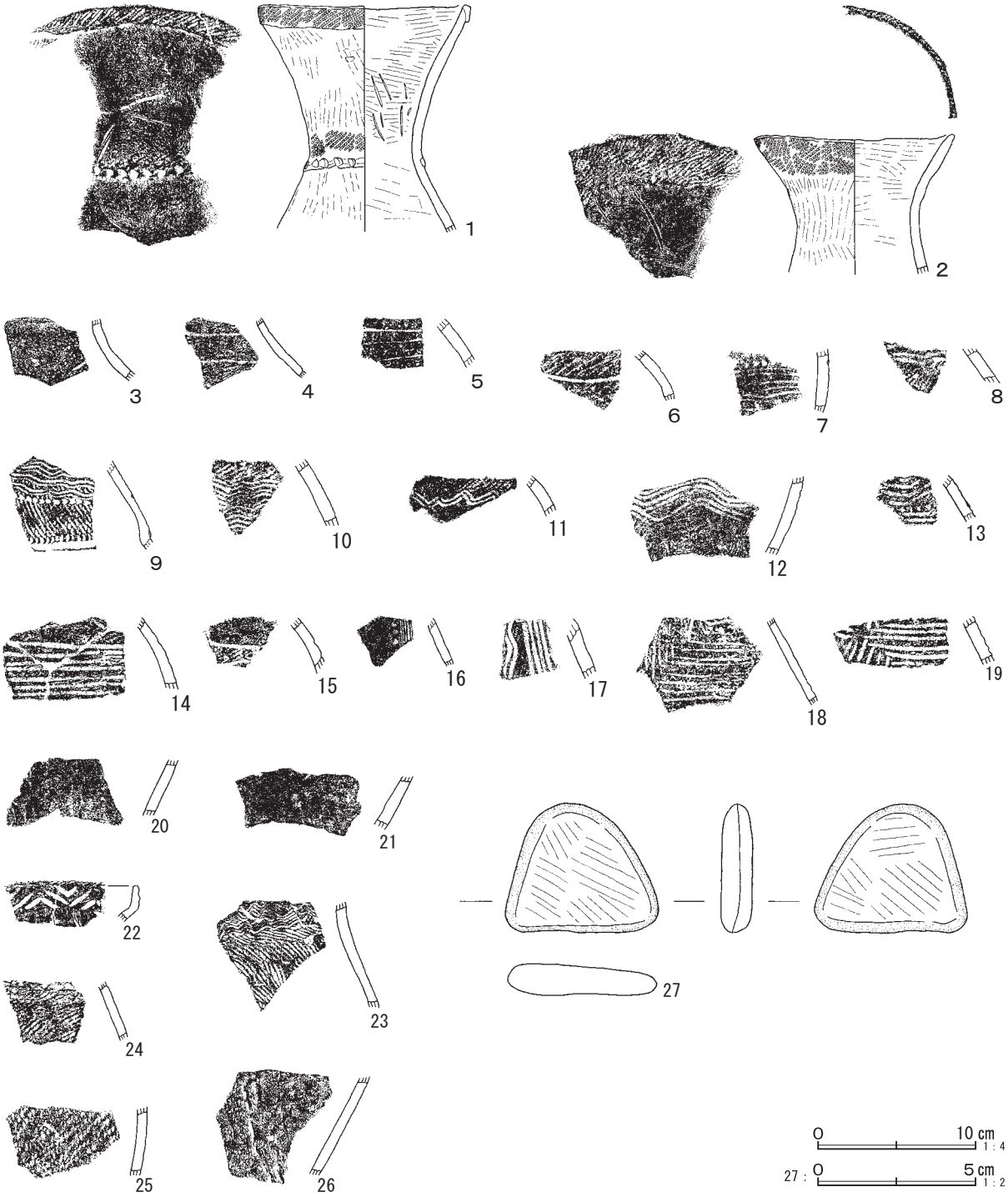
壁溝は、東壁中央付近から第１号住居跡と重複する北壁まで巡るが、北東隅は壁からやや離れて巡る。幅は0.２ｍ前後、床面からの深さは0.06ｍ程を測る。

ピットは３基確認された。いずれもその位置から主柱穴ではないと思われる。本住居跡に伴わない可能性もある。

炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第13図）は、弥生土器壺（１～21）、甕（22～26）、磨石（27）がある。残存状態が比較的良好な１は、口縁部から頸部までが第１号方形周溝墓北周溝の底面、頸部から肩部までが本住居跡中央付近の床面直上から出土した。２はピット３南の床面直上、その他は覆土から出土した。土器は、摩耗の著しいものが大半を占める。

１～21は、壺である。破片は、判別の難しいものがあるが、11・16・17は中部高地栗林式系である。１は、口縁部から肩部までの部位である。端部が角張り、肥厚した口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。肩部は、ハの字に下る。外面文様は、端部を含む口縁部、頸部と肩部の境付近にＬＲ単節縄文が施文され、後者の下位に半円形の刺突列が刻まれた突帯が１条巡る。調整は、口縁部の縄文帯直下から頸部上位までと肩部の無文部が縦位のヘラミガキ、内面は口縁部から頸部までが斜位のヘラミガキ、肩部は斜位のヘラナデである。頸部外面に豆形状を呈する凹み、頸部内面に斜・縦位のヘラによる刻みがみられた。２は、口縁部から頸部までの部位である。口縁部が逆ハの字に開き、すぼまる頸部がほぼ直立する。外面文様は、端部を含む口縁部にＬＲ単節縄文が施文されているのみである。



第13図　第４号住居跡出土遺物

頸部は、無文である。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、頸部の外面無文部は縦・斜位、内面は全面横・斜位に施されている。

３～７は、外面にヘラ描きの平行線文が巡る破片である。３は頸部から肩部まで、４は肩部、５・６は胴上部、７は胴部中段付近の破片である。３は分かりづらいが、上位に浅い平行線文が１条巡る。以下は、無文である。４は、細い平行線文が間隔を空けて２条巡る。摩耗が著しいため、地文ないし平行線文間に縄文が施文されているか不明である。５は、細い平行線文がやや間隔を空けて３条巡る。分かりづらいが、地文にＬＲ単節縄文が施文されている。６は、平行線文上位にＬＲ単節縄文が充填

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	13.5	(14.4)	－	ABCHIKN	褐灰　黄灰	B	口～肩80%	内外面摩耗顕著。頸部外面凹み有。
2	弥生土器　壺	12.7	(8.85)	－	ABDEIKN	灰白　灰	B	口～頸70%	内外面大半摩耗顕著。
3	弥生土器　壺	－	－	－	ABEIKN	外:橙　内:明黄褐	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄褐　内:にぶい黄橙	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABHKN	外:褐灰　内:橙	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
7	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい褐　内:黒褐	B	胴中段片	内外面やや摩耗。
8	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:褐灰　内:灰黄褐	B	肩～胴上片	
10	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
11	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIK	外:灰黄褐　内:褐灰	B	胴上部片	外面大半摩耗顕著。
12	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい橙　内:橙	B	胴中～下片	内外面大半摩耗顕著。
13	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	外:にぶい黄橙　内:にぶい黄褐	B	肩部片	内外面やや摩耗。
14	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIN	外:にぶい橙　内:橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
15	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:淡黄　内:黄灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
16	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	褐灰色	B	肩部片	内面摩耗顕著。
17	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:黄灰　内:褐灰	B	肩部片	内面やや摩耗。
18	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:暗褐　内:にぶい黄橙	B	肩～胴上片	内面やや摩耗。
19	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	橙色	B	胴上部片	外面やや摩耗。
20	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面所々摩耗顕著。
21	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:橙　内:にぶい黄褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
22	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:褐灰　内:灰褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
23	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
24	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
25	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:橙　内:にぶい黄橙	B	胴中段片	内外面大半摩耗顕著。
26	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄　内:にぶい黄	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
27	磨　石	最大長4.1㎝、最大幅4.8㎝、最大厚1.0㎝。重量25.5g。完形。砂岩。							

されているが、下位の無文部にはみ出ている。７は、半円形の刺突列下位に細い平行線文が密に複数巡る。重四角文の可能性がある。分かりづらいが、地文にＲＬ単節縄文が施文されている。調整は、３の外面無文部と内面、４の内面は摩耗が著しいため不明、５・７の内面は横・斜位のヘラナデ、６の外面無文部は横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。４は、胎土がやや粗い。

８～12は、外面に波状文が横位に巡る破片である。８は肩部、９は肩部から胴上部まで、10・11は胴上部、12は胴部中段付近から下部までの破片である。波状文は、８のみヘラ、その他は２本一単位の櫛歯状工具で描かれている。８は、上位に緩い波状文が２条巡り、下位にＬＲ単節縄文が施文されている。９は、上位に波状文が４条巡り、直下に半円形、下位の段下に爪形の刺突列が各１列巡る。地文に無節Ｒが施文されている。10は、ＬＲ単節縄文下位に波状文が密に複数巡る。11は、ＬＲ単節縄文下位に波状文が１条巡る。下位は、無文である。12は、上位に波状文が密に複数巡り、下位は分かりづらいが、細かいＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、８の内面は摩耗が著しいため不明、９・10の内面は横位のヘラナデ、11の外面無文部は斜位のヘラミガキ、内面は斜位のヘラナデ、12の内面は横・斜位のヘラナデである。

13～15は、外面にヘラ描きの平行線文と横位の波状文が巡る破片である。13は肩部、14・15は胴上部の破片である。13は、上位に波状文が３条、下位に平行線文が２条、間に半円形ないし爪形の刺突列が１列巡る。14は、上位に波状文が１条巡り、ＬＲ単節縄文か無節Ｌが施文された縄文帯を挟んだ下位に平行線文が密に複数巡る。15は、下位に平行線文と波状文が巡り、間にＬＲ単節縄文が充填されている。上位は、無文である。調整は、13の内面が横・斜位のヘラナデ、14の内面、15の外面無文部と内面は摩耗が著しいため不明である。14は、胎土が粗い。

16・17は、外面に櫛歯状工具で懸垂文が描かれた肩部片である。櫛歯の数は、16が不明、17は２本

である。17は、櫛歯が太い。懸垂文脇に16は半円形の刺突列、17は同一工具による波状文が垂下する。調整は、16の外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明、17の内面は横位のヘラナデである。16は、胎土が密である。

18・19は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片である。18は肩部から胴上部まで、19は胴上部の破片である。ヘラは、18が細く、19は太い。内面調整は、18が横・斜位、19は横位のヘラナデである。

20・21は、無文の胴下部片である。壺としたが、甕の可能性もある。調整は、20の外面が縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ、21は内外面ともに摩耗が著しいため不明である。20は、胎土に石英を多量含む。21は、胎土が密である。

22～26は、甕の破片である。22は、中部高地栗林式系の口縁部から頸部までの破片である。外面文様は、口縁端部にＬＲ単節縄文が施文され、口縁部外面にヘラ描きのやや太い山形文が巡る。頸部外面と内面全面の調整は、摩耗が著しいため不明である。

23～25は、外面に縄文が施文された破片である。23は頸部から胴上部まで、24は胴上部、25は胴部中段付近の破片である。縄文は、23が無節Ｒ、その他はＬＲ単節縄文であり、23は胴部全面、24・25は外面全面に施文されている。縄文以外の文様は、23の頸部に４本一単位の櫛歯状工具による波状文が２段巡る。内面調整は、すべてヘラナデであり、23は斜位、24・25は横位に施されている。23は、胎土に白雲母を多量含む。25は、胎土がやや粗い。

26は、無文の胴下部片である。調整は、外面は摩耗が著しいため不明、内面は横・斜位のヘラナデである。甕としたが、壺の可能性もある。

27は、小型の磨石である。完形である。石材は、砂岩である。扁平である。

本住居跡の時期は、第１・２号住居跡より古い弥生時代中期後半と思われる。

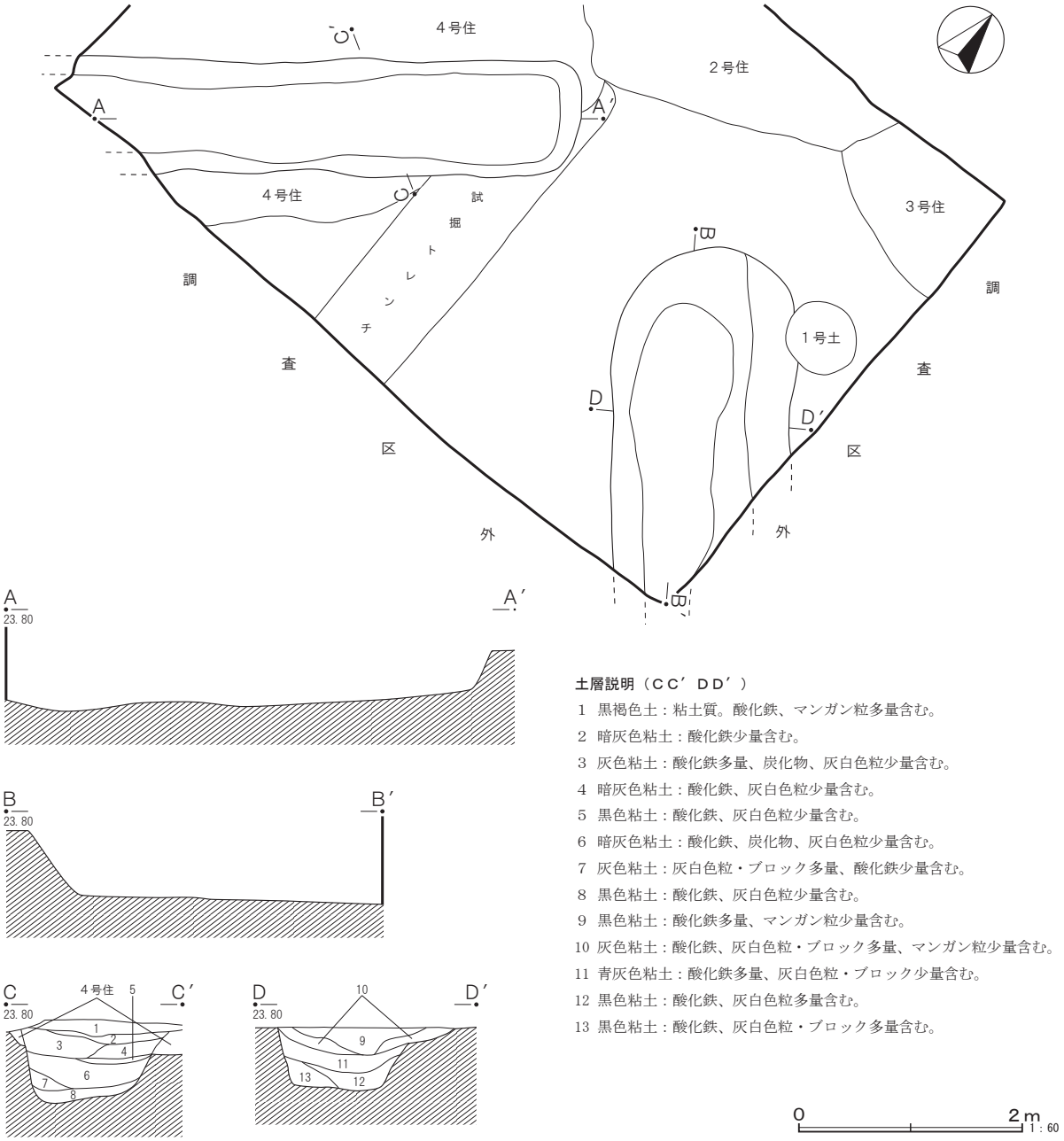
２　方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第14図）

53・54－145・146グリッドに位置する。検出されたのは、東・北周溝である。東周溝は、北東部の立ち上がり付近を第１号土坑に切られており、北周溝は第４号住居跡を切っている。東周溝は南半分以上、北周溝は西側1/3程が調査区外にある。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓と思われる。主軸方向は、Ｎ－38°－Ｗを指す。正確な規模は不明であるが、検出された周溝の長さは、東周溝が3.11ｍ、北周溝は4.72ｍである。検出された幅は、東周溝が1.65ｍ前後と広いが、北周溝は１ｍ前後と狭い。確認面からの深さは、東周溝が最大0.68ｍ、北周溝は0.51ｍを測り、東周溝がやや深い。立ち上がりは、いずれも鋭角に掘り込まれており、断面形は逆台形状を呈するが、東周溝の東側立ち上がりは確認面より0.15ｍ程下に段を持つ。底面は、東周溝が北西から南東にやや傾斜し、北周溝はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、東・北周溝で内容が異なり、東周溝は５層（９～13層）、北周溝は８層（１～８層）確認された。いずれも混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

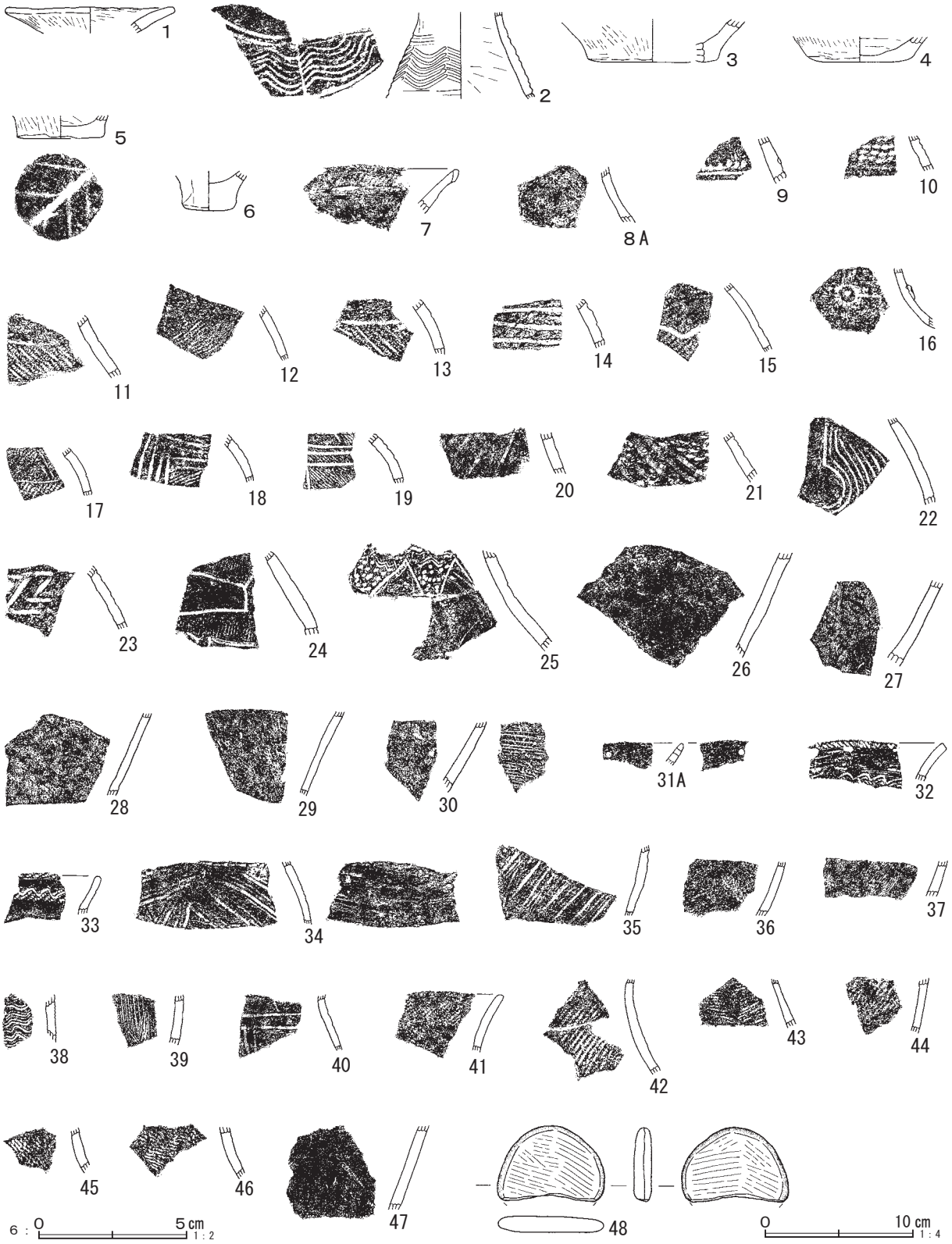
方台部にマウンドの痕跡は確認されず、調査区外南側に続く試掘トレンチにおいてもマウンドや主体部の痕跡は確認されなかった。



第 14 図　第１号方形周溝墓

出土遺物（第 15 図）は、弥生土器壺（１～４・７～30）、広口壺（31）、甕（５・32～47）、ミニチュア（６）、磨石（48）がある。出土遺物は、すべて弥生時代のものであるが、本周溝墓に確実に伴うのは後期初頭の 25 のみである。その他は中期後半であり、流れ込みと思われる。１・２・６・12・16・20・31・36・37・41・47 が東周溝、その他は北周溝からの出土であるが、特に出土量の多い後者は、重複する第４号住居跡からの流れ込みと思われる。土器は、摩耗の著しいものが大半を占める。

１～４・７～30 は、壺である。１は、中部高地栗林式系壺の口縁部である。口縁部が大きく外反しながら立ち上がる。調整は、内外面ともにヘラミガキである。２は、頸部から肩部までの部位である。無文の頸部がほぼ直立し、肩部はハの字に下る。外面文様は、肩部上下にヘラ描きの平行線文が上位に２条、下位に１条以上、間に波状文が６条巡る。摩耗が著しいため定かではないが、地文に縄文が



第15図　第１号方形周溝墓出土遺物

施文されている可能性がある。調整は、頸部外面無文部がヘラミガキ、内面は全面ヘラナデである。３・４は、胴下部から底部までに収まる部位である。壺としたが、甕の可能性もある。３は、底部がやや円柱状を呈する。調整は、いずれも外面がヘラミガキ、３の内面は摩耗が著しいため不明、４の内面はヘラナデである。４は、胎土がやや粗い。

第６表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	東周溝	弥生土器　壺	(11.5)	(1.75)	－	ABCHIN	にぶい橙色	B	口縁部30%	内外面摩耗顕著。
2	東周溝	弥生土器　壺	－	(5.85)	－	ABEHIKN	黄灰色	B	頸～肩25%	内外面摩耗顕著。
3	北周溝	弥生土器　壺	－	(2.9)	(8.7)	ABCDIKN	浅黄橙色	B	胴～底40%	内外面摩耗顕著。
4	北周溝	弥生土器　壺	－	(1.75)	(7.3)	ABCDIKN	外:灰黄　内:黒褐	B	底部45%	内外面摩耗顕著。
5	北周溝	弥生土器　甕	－	(1.55)	5.9	ABDHIKN	外:灰褐　内:黒褐	B	底部100%	外面摩耗顕著。
6	東周溝	弥生土器ミニチュア	－	(1.35)	1.8	ABEKN	外:明赤褐　内:にぶい褐	B	底部90%	内外面摩耗顕著。
7	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄　内:暗灰黄	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
8	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDIKN	外:にぶい橙　内:にぶい黄褐	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
9	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:灰黄褐　内:褐灰	B	肩部片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
10	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	外:にぶい黄橙　内:にぶい黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
11	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄褐　内:褐灰	B	肩部片	13同一個体。
12	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHIKN	外:にぶい橙　内:褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
13	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄	B	胴上部片	内外面やや摩耗。11同一個体。
14	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
15	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄　内:黄灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
16	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:橙　内:浅黄橙	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
17	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:黒褐　内:浅黄	B	胴上部片	内面大半剥離。
18	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDIN	外:褐灰　内:灰黄褐	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
19	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:黒褐　内:褐灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
20	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	黒褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
21	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	肩部片	
22	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIK	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴上部片	内外面所々摩耗。
23	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:橙　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
24	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	淡黄色	B	胴上部片	
25	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHN	外:浅黄橙　内:灰白	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
26	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:淡黄　内:浅黄	B	胴下部片	外面やや摩耗。
27	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:黒	B	胴下部片	外面大半摩耗顕著。
28	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEHIKN	灰黄色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
29	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴下部片	内外面所々摩耗顕著。
30	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:浅黄橙　内:浅黄	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
31	東周溝	弥生土器広口壺	－	－	－	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
32	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:黒褐　内:灰黄褐	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
33	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	外:黒褐　内:褐灰	B	口～頸部片	
34	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙　褐灰	B	頸～胴上片	
35	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい黄褐　内:にぶい橙	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
36	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIK	外:にぶい黄褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
37	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄褐　内:浅黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
38	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:浅黄橙　内:灰白	B	胴中段片	内面摩耗顕著。
39	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:黒褐　内:浅黄	B	胴中段片	内面やや摩耗。
40	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや摩耗。
41	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
42	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄　内:灰黄	B	頸～胴上片	内外面やや摩耗。
43	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
44	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴中～下片	内面全面、外面大半摩耗顕著。
45	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	外:黄灰　内:淡黄	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
46	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄　内:浅黄	B	頸～胴上片	内外面大半摩耗顕著。
47	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIK	外:黒褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
48	北周溝	磨　石	最大長(4.75)㎝、最大幅(7.25)㎝、最大厚1.25㎝。重量(60.0)g。片側面欠。砂岩。							

７は、口縁部から頸部までの破片である。外面文様は、端部を含む口縁部外面にＬＲ単節縄文が施文されている。頸部は、無文である。頸部外面無文部と内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。

８は、頸部から肩部までの破片である。無文であり、外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。調整は、摩耗が著しいため内外面ともに不明である。

９～14は、外面にヘラ描きの平行線文が巡る破片である。９～11は肩部、12～14は胴上部の破片である。11・13は、同一個体である。９は、下位の段下に半円形の刺突列と細い平行線文が２条巡る。上位は、無文である。10は、上位に半円形の刺突列が横位に３列施文され、下位に浅い平行線文が１条巡る。11は分かりづらいが、平行線文がほぼ等間隔に３条巡り、上位の平行線文間は無文、下位はＲＬ単節縄文が充填されている。12は、摩耗が著しいため分かりづらいが、中段に浅い平行線文が２条巡り、地文に無節Ｌが施文されている。13は、中段に平行線文が１条巡り、上位は無文、下位はＲ

Ｌ単節縄文が施文されている。14 は、やや太い平行線文が等間隔に３条巡り、地文にＲＬ単節縄文か無節Ｒが施文されている。調整は、９の外面上位無文部が横位のヘラミガキ、13 の内面は横・斜位のヘラナデであるが、９・10・12・14 の内面、11 の外面上位無文部と内面、13 の外面上位無文部は、摩耗が著しいため不明である。14 は、胎土がやや粗い。

15 は、外面にヘラ描きの波状文が横位に１条巡る胴上部片である。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

16 ～ 19 は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片である。16 は頸部から肩部まで、17 ～ 19 は胴上部の破片である。16 は、分かりづらいが、頸部に重四角文が描かれており、肩部上位はボタン状貼付文脇に半円形の刺突列、下位にヘラ描きの平行線文１条が巡る。肩部下位は、無文である。17 は、ＬＲ単節縄文地に細いヘラで重四角文が描かれている。18 は、重四角文内にＬＲ単節縄文が充填されている。19 は、ＲＬ単節縄文地に重四角文が描かれている。16 の肩部外面下位の無文部と内面、17 ～ 19 の内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。

20・21 は、外面にヘラで重三角文が描かれた肩部片である。20 は沈線が細くて間隔が広いが、21 は幅広で間隔が狭い。21 は、区画内に爪形の刺突列が横位に充填されている。中期中葉のものであり、流れ込みと思われる。内面調整は、20 は摩耗が著しいため不明、21 は横・斜位のヘラナデである。

22 は、外面にヘラでフラスコ文が描かれた胴上部片である。フラスコ文内にＬＲ単節縄文が充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。

23 は、外面にヘラでＺ状の文様が複数描かれた胴上部片である。摩耗が著しいため分かりづらいが、Ｚ状文様下位にＲＬ単節縄文か無節Ｒが施文されている。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。胎土がやや粗い。

24 は、外面にヘラで凸ないし工字状の文様が描かれた胴上部片である。調整は、外面無文部が縦・斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された縦位のハケメが所々に残る。内面は、横・斜位のヘラナデである。

25 は、外面にヘラで下向きの鋸歯文が描かれた肩部片である。鋸歯文上位に２本一単位の櫛歯状工具による煩雑な波状文が横位に１条巡り、鋸歯文区画内は竹管状工具による円形刺突がランダムに充填されている。鋸歯文下位は、無文である。調整は、外面下位の無文部は斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。内面は、摩耗が著しいため不明である。

26 ～ 30 は、無文の胴下部片である。壺としたが、甕の可能性もある。調整は、26・27・29 の外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ、28 の内外面、30 の外面は摩耗が著しいため不明、30 の内面は横位のハケメである。胎土に 27 は黒色粒、28 は白雲母を多量含む。

31 は、広口壺の口縁部片である。焼成前穿孔が１つみられた。調整は、外面は摩耗が著しいため不明、内面は横位のヘラミガキである。内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

５・32 ～ 47 は、甕である。32 ～ 38・40 は、中部高地栗林式系である。５は、底部である。円柱状を呈する。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。底面に木葉痕がみられた。甕としたが、壺の可能性もある。

32・33 は、外面に波状文が横位に巡る口縁部から頸部までの破片である。波状文は、32 が頸部に３

本以上の櫛歯状工具、33 は口縁部に細いヘラで描かれている。波状文以外の外面文様は、32 が口縁端部にＲＬ単節縄文、33 は口縁端部と口縁部の波状文が巡る部分にのみＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、32 の口縁部外面無文部の上位が横位のヘラミガキ、下位は横ナデ、内面は摩耗が著しいため不明である。33 は、口縁部と頸部の外面無文部と口縁部内面が横ナデ、頸部内面は横位のヘラミガキである。33 は、胎土が密である。

34 ～ 39 は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。34 ～ 37 は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。34 は頸部から胴上部まで、35 ～ 37 は胴部中段付近から胴下部までに収まる破片である。櫛歯の単位は、34・35 が４本、36・37 は不明である。37 は、櫛歯が細かい。羽状文以外の外面文様は、34 の頸部に同一工具による簾状文が巡る。内面調整は、34 が横位のヘラナデが明確に残り、35 ～ 37 は摩耗が著しいため不明である。

38 は、外面に波状文が横位に巡る胴部中段付近の破片である。櫛歯の単位は、５本である。波状文は、やや煩雑で密に巡る。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

39 は、外面に斜線文ないし縦線文が描かれた胴部中段付近の破片である。櫛歯の単位は、７本である。内面調整は、横位のヘラナデである。

40 は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた頸部から胴上部までの破片である。頸部は、無文である。調整は、頸部外面無文部が横ナデ、内面は頸部が斜位、胴上部は横位のヘラナデである。

41 ～ 46 は、外面に縄文が施文された破片である。41 は口縁部から頸部まで、42・43・45・46 は頸部から胴上部まで、44 は胴部中段付近から下部までの破片である。縄文は、41 ～ 44 がＬＲ、45 はＲＬ単節縄文、46 は無節Ｒであり、41 は端部を含む口縁部、その他は外面全面に施文されている。41 の頸部外面は、無文である。調整は、41 の頸部外面無文部が横・斜位のヘラミガキ、42 の内面は横位、46 の内面は横・斜位のヘラナデ、41・43 ～ 45 の内面は摩耗が著しいため不明である。41 は、胎土に白雲母を多量含む。

47 は、無文の胴下部片である。甕としたが、壺の可能性もある。調整は、外面が縦・斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明である。

６は、ミニチュア土器の底部である。厚底で円柱状を呈する。調整は、内外面ともにヘラナデである。胎土がやや粗い。

48 は、砂岩製の磨石である。片側面を欠く。扁平である。

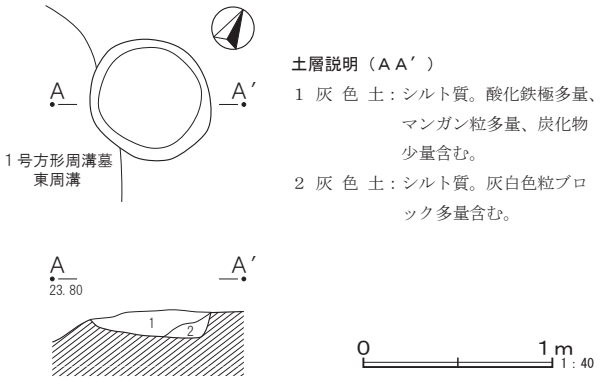
伴う出土遺物は少ないが、本住居跡の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

３　土坑

第１号土坑（第 16 図）

53 － 145 グリッドに位置する。西側で第１号方形周溝墓の東周溝東側の立ち上がりを切っている。

径 0.65 m前後の円形を呈する。確認面からの

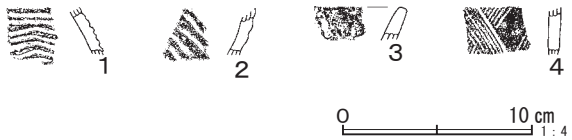


第 16 図　第１号土坑

第７表　第１号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIK	外:黒褐　内:灰黄褐	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
2	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	外:灰黄褐　内:黒褐	B	胴中～下片	
3	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい黄橙　内:黒褐	B	口縁部片	内外面やや摩耗。
4	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:黒褐	B	胴中段片	

深さは、最大 0.15 ｍを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は西から東へやや傾斜する。覆土は、２層（１・２層）確認された。いずれもシルト質で混入物がみられたが、自然堆積と思われる。



第17図　第１号土坑出土遺物

出土遺物（第 17 図）は、弥生土器壺（１・２）、甕（３・４）がある。すべて破片である。

１・２は、壺である。１は胴上部、２は胴部中段から下部までの破片である。２は、中部高地栗林式系の可能性がある。１は、外面上位にヘラ描きの平行線文が２条、下位に緩い波状文が５条横位に巡る。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。２は、外面にヘラ描きの連弧文と思われる文様が巡る。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

３・４は、甕である。３は口縁部、４は胴部中段付近の破片である。４は、中部高地栗林式系である。３は、無文である。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、内面は横・斜位、外面は横位に施されている。４は、外面に７本一単位の櫛歯状工具で斜格子文が描かれている。内面調整は、横位のヘラナデである。

出土遺物は、本土坑に伴うものではないと思われる。従って、本土坑の時期は、重複する第１号方形周溝墓との新旧関係から弥生時代後期初頭以降としか言えない。

４　遺構外出土遺物

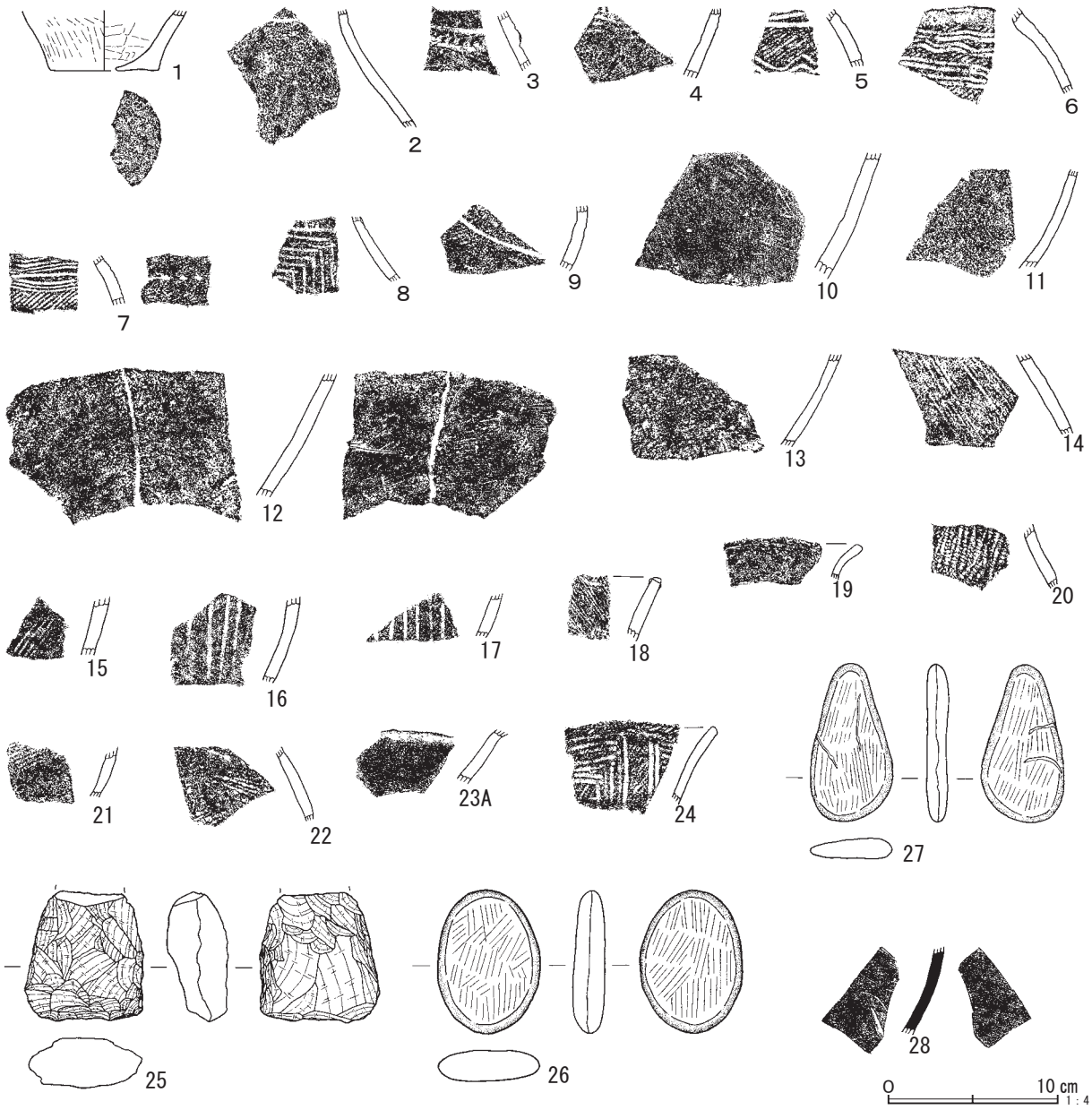
遺構外出土遺物は、弥生時代中期後半の土器・石器と古墳時代後期以降の須恵器があり、最も多く出土したのは弥生土器である。

出土遺物（第 18 図）は、弥生時代中期後半の壺（１～13）、甕（14～22）、高坏（23）、筒形（24）、打製石斧（25）、磨石（26・27）、古墳時代後期以降の須恵器瓶（28）がある。弥生土器は、摩耗の著しいものが大半を占める。

１～ 13 は、弥生土器壺である。１は、胴下部から底部までの部位である。底部中央の器壁が薄く、径 1.4 ㎝前後の焼成前穿孔がみられた。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。

２・３は、外面にヘラ描きの平行線文が巡る破片である。２は頸部から胴上部まで、３は肩部の破片である。２は、頸部に平行線文が１条巡り、以下は無文である。３は、半円形の刺突列が刻まれた段の上下に平行線文が巡る。平行線文上位は無文、下位はＲＬ単節縄文と思われる縄文が施文されている。２・３の外面無文部と内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。２は、胎土に 0.15 ㎜前後を測る赤褐色粒を多量含む。

４は、外面にヘラ描きの波状文が横位に巡る胴下部片である。波状文は、上位に４条巡る。下位は、無文である。外面下位の無文部と内面の調整は、摩耗が著しいため不明である。胎土に白色粒を多量含む。



第18図　遺構外出土遺物

５～７は、外面に平行線文と波状文が巡る胴上部片である。５は、上位にヘラ描きの平行線文、下位に波状文が各２条巡り、間にＬＲ単節縄文が充填されている。６は、上位に２本一単位の櫛歯状工具による波状文、下位に同一工具による平行線文が２段巡る。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。７は、上位に３本一単位の櫛歯状工具による緩い波状文が２段、間にヘラ描きの平行線文が１条巡り、下位にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、すべて摩耗が著しいため不明である。７は、内面に輪積痕が残る。

８は、外面にヘラで重四角文が描かれた肩部片である。重四角文以外の文様は、重四角文上位に半円形の刺突列が巡る。内面調整は、摩耗が著しいため不明である。

９は、外面にヘラ描きの連弧文と思われる文様が描かれた胴下部片である。調整は、外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明である。

10 ～ 13 は、無文の胴下部片である。調整は、10 の外面が斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ

第８表　遺構外出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	－	(3.55)	(6.4)	ABIN	外:にぶい褐　内:黒褐	B	胴～底40%	弥生中。内外面摩耗顕著。焼成前穿孔有。
2	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHKN	明赤褐色	B	頸～胴上片	弥生中。内外面摩耗顕著。
3	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIN	外:灰黄褐　内:にぶい橙	B	肩部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
4	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIK	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴上部片	弥生中。内面摩耗顕著。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHIKN	外:にぶい黄褐　内:にぶい橙	B	胴上部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
7	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	弥生中。内面摩耗顕著。内面輪積痕有。
8	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIKN	外:にぶい橙　内:橙	B	肩部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
9	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:黄灰	B	胴下部片	弥生中。内面摩耗顕著。
10	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい黄褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	弥生中。内面摩耗顕著。
11	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	弥生中。内外面やや摩耗。
12	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:浅黄橙　内:褐灰	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
13	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	外:灰白　内:橙	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
14	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	弥生中。内面大半、外面全面摩耗顕著。
15	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
16	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
17	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	外:にぶい橙　内:灰褐	B	胴下部片	弥生中。内外面やや摩耗。
18	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:黄灰　内:橙	B	口縁部片	弥生中。
19	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
20	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:黄灰　内:淡黄	B	頸～胴上片	弥生中。内外面やや摩耗。
21	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴下部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
22	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIK	外:黒褐　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	弥生中。内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
23	弥生土器　高坏	－	－	－	ABHIK	外:浅黄橙　内:淡黄	B	口～坏部片	弥生中。外面摩耗顕著。外面赤彩、大半剥落。
24	弥生土器　筒形	－	－	－	ABHIKN	外:褐灰　内:にぶい黄褐	B	口～頸部片	弥生中。内外面やや摩耗。
25	打製石斧	最大長(7.7)cm、最大幅6.9cm、最大厚3.6cm。重量(232.0)g。刃部残。粘板岩。							
26	磨　石	最大長8.4cm、最大幅6.05cm、最大厚1.85cm。重量142.0g。完形。砂岩。							
27	磨　石	最大長9.35cm、最大幅4.8cm、最大厚1.25cm。重量81.0g。完形。砂岩。							
28	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	外:灰　内:褐灰	B	胴下部片	古墳後以降。南比企産。外面自然釉付着。

前に施された斜位のハケメが残る。内面は、摩耗が著しいため不明である。11 は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。12 は、外面が横・斜位のヘラミガキ、内面は斜位のハケメ後、部分的に斜位のヘラミガキが施されている。13 は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。

14 ～ 22 は、弥生土器甕である。14 ～ 17 は、中部高地栗林式系である。14・15 は、胴部外面に櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれた破片である。14 は胴上部、15 は胴下部の破片である。櫛歯の単位は、14 が６本、15 は４本である。内面調整は、14 が横・斜位のヘラミガキ、15 は摩耗が著しいため不明である。

16･17 は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた胴下部片である。いずれも沈線が太い。調整は、16 の外面無文部と内面は摩耗が著しいため不明、17 の外面無文部は横位のハケメ、内面は横位のヘラミガキである。

18 は、波状を呈する口縁部片である。口縁端部に竹管状工具の側面を上から押圧している。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。胎土に白色粒を多量含む。

19 ～ 22 は、外面に縄文が施文された破片である。19 は口縁部から頸部まで、20 は頸部から胴上部まで、21 は胴下部、22 は胴上部の破片である。縄文は、19 ～ 21 がＬＲ単節縄文、22 は無節Ｌであり、19 は口縁端部、20 は外面全面、21 は外面上位、22 は外面全面ではなく部分的に施文されている。19 の口縁部外面、21 の外面下位は無文である。調整は、19 の外面無文部が横ナデ、19・20 内面は横・斜位のヘラミガキ、21 の外面無文部と内面、22 の内面は摩耗が著しいため不明、22 の外面無文部は斜位のヘラミガキである。

23 は、弥生土器高坏の口縁部直下から坏部までの破片である。調整は、内外面ともに横位のヘラミ

ガキである。外面に赤彩が施されているが、大半が剥落している。胎土が密である。

24 は、弥生土器筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。外面にやや太いヘラで重四角文が描かれている。口縁端部と外面の地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

25 ～ 27 は、石器である。25 は、打製石斧である。基部を含む上半分を欠く。石材は、粘板岩である。小型で撥形を呈すると思われる。26・27 は、砂岩製の磨石である。いずれも完形、扁平である。

28 は、古墳時代後期以降の須恵器瓶の胴下部片である。南比企産である。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着しており、ヘラによる刻みがみられた。

Ⅴ　調査のまとめ

前中西遺跡の報告は、今回で14回目となる。本遺跡は、縄文時代晩期末から近世まで続く複合遺跡であるが、中でも弥生時代の遺構・遺物の検出数が突出している。本遺跡の弥生時代集落は、広大な遺跡範囲北側の東西に分布しており、本報告地点は東側集落のほぼ中心に位置することから今回検出された遺構・遺物もそのほとんどが弥生時代である。従って、ここでは本報告地点で検出された弥生時代の遺構・遺物について簡潔にまとめてみたい。

本遺跡の弥生時代については、2013（平成25）年に開催されたシンポジウムにより詳細の一端が明らかになっている（関東弥生文化研究会ほか2013・2014）。出土土器を基にした時期区分は、①中期中葉新段階（池上式新段階）、②中期後半古段階（北島式古段階）、③中期後半中段階（北島式中段階）、④中期後半新段階（北島式新段階）、⑤中期末（用土・平遺跡段階）、⑥後期初頭（岩鼻Ⅰ式）、⑦後期前半（岩鼻Ⅱ式）の７期に区分され、長期にわたる大規模かつ当地域における拠点集落であったことが判明している。集落の動向については、開始期の①中期中葉新段階から②中期後半古段階までは小規模であるが、③中期後半中段階になると大規模になり、⑤中期末以降は縮小していく。遺構は、主に南関東の影響を受けた在地の系統を持ち続けるが、遺物は時期が下るにつれて中部高地の栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、在地と外来系の要素が融合した独自の地域社会が展開されていたことが明らかとなっている。なお、栗林式土器編年との関係については、①が栗林１式、②が栗林２式古段階、③④が栗林２式新段階、⑤が栗林３式に併行する。

本報告地点では、弥生時代の住居跡が４軒、方形周溝墓が１基検出された。調査区の都合から全形を検出した遺構はないが、遺構同士の重複が激しいことは、過去に実施された周辺の調査成果と同様であり、本報告地点が東側集落のほぼ中心に位置することを物語る。本報告では、出土土器に全形の分かる個体が少なく、時期を特定するには出土量も少ないが、住居跡は中期後半、方形周溝墓は後期初頭に相当すると思われる。住居跡は、すべて中期後半に相当すると思われるが、重複していたことから時期差を持つことは間違いない。以下、上記の時期区分に基づき、出土土器（壺・甕）の様相と重複する遺構との新旧関係から具体的な時期を探ってみたい。

第１号住居跡出土土器は、壺は在地系が栗林式系よりやや多く、甕は在地系と栗林式系の割合がほぼ半々である。壺・甕ともにその文様から③中期後半中段階に相当するものが多いと思われるが、栗林式系である第６図１の壺は、口縁部から頸部までの残存で頸部に文様がみられるが、肩部以下はおそらく無文で文様の簡素化が進行した新しい段階のものと思われる。また、第６図２の甕は、器形的に頸部と胴部に境がなく一体化している点、頸部に簾状文、胴部に縦位の羽状文が密に描かれているが、いずれもやや煩雑である点は、新しい要素と思われる。他の住居跡との新旧関係については、本住居跡が後述する③中期後半中段階に相当する第４号住居跡を切っている。第１号住居跡の時期は、第６図１・２に新しい要素が見られること、第４号住居跡より新しいことから④中期後半新段階に位置付けたい。

第２号住居跡出土土器は、壺・甕ともに栗林式系が比較的多い。第９図１・２は、１は口縁部の開きが小さいが、いずれも内外面に赤彩が施されており、栗林式系の小型壺と思われる。甕は、破片に

栗林式系が多く、全形の分かる第９図５は全面無文であるが、その器形から栗林式系の可能性がある。第９図４は、縄文が施文された在地系の甕であるが、口縁部から頸部まで無文であり、外面全面に縄文が施文されていない点は、その器形も含め、中期後半でも新しい段階のものと思われる。他の住居跡との新旧関係については、本住居跡が③中期後半中段階に相当する第３・４号住居跡を切っている。第２号住居跡の時期は、栗林式系が多いこと、第９図４に新しい要素が見られること、第３・４号住居跡より新しいことから④中期後半新段階と思われる。

第３号住居跡出土土器は、量が少なく破片が多いが、壺は在地系が多く、甕は在地系と栗林式系の割合が半々である。他の住居跡との新旧関係については、本住居跡が④中期後半新段階に位置付けた第２号住居跡に切られている。第３号住居跡の時期は、出土遺物が少ないが、第２号住居跡より古いことを重視して③中期後半中段階に位置付けたい。

第４号住居跡出土土器は、壺・甕ともに在地系が多く、栗林式系が少ない。このうち残存状態の良好な第 13 図１・２の壺は、口縁部から肩部までに収まる部位であるが、在地系北島式中段階の壺の典型と言える個体である。なお、１は第Ⅳ章でも述べたが、口縁部から頸部までの部位は重複する第１号方形周溝墓北周溝から出土したものであり、本住居跡ほぼ中央の床面直上から出土した頸部から肩部までの部位と接合関係が認められた個体である。２と同様の器形・文様を持つことから第４号住居跡に伴うものと判断した。甕は、破片のみの出土であるが、栗林式系と確実に言えるのは第 13 図 22 のみである。また、重複する第１号方形周溝墓北周溝では、本住居跡からの流れ込みと思われる土器が多数出土しているが、栗林式系が多くない点は本住居跡出土土器と共通する。他の住居跡との新旧関係については、本住居跡が第１・２号住居跡に切られている。以上の内容から、第４号住居跡の時期は、③中期後半中段階と思われる。

第１号方形周溝墓出土土器は、前述のとおり、そのほとんどが流れ込みである。特に量の多い北周溝出土遺物は、第４号住居跡からの流れ込みと思われ、本方形周溝墓に伴うのは⑥後期初頭に相当する 25 のみと思われる。

以上、本報告地点で検出された弥生時代の遺構・遺物について述べたが、その変遷をまとめると以下のとおりとなる。

③第３・４号住居跡　→　④第１・２号住居跡　→　⑥第１号方形周溝墓

③中期後半中段階の２軒は、近接して位置するが、果たして同時に存在したのか、あるいは時期差を持つのか今回の成果だけでは判断が難しい。④中期後半新段階の２軒も近接して位置するが、第１号住居跡出土土器は、③中期後半中段階のものもみられることから第１号住居跡が古く、第２号住居跡が新しいと思われる。⑥後期初頭の方形周溝墓は、過去に実施した調査で西へ 80 m程離れた箇所でも検出されていることから周辺にはまだ同時期の方形周溝墓が点在する可能性がある。

本遺跡における弥生時代の東側集落は、周辺における過去の調査成果から中期後半中～新段階は居住域で大規模に展開されるが、中期末になると縮小傾向に陥り、後期には墓域に転換することが確認されていたが、今回改めてそのことが再確認出来たことは、本報告における最大の成果である。

弥生時代を含む本遺跡の様相については、今後も土地区画整理事業をはじめとする各種工事に伴う発掘及び整理調査によりまた新たな成果を得ることが出来ると思われる。今後の進展に期待したい。

引用・参考文献

関東弥生文化研究会ほか　2013『シンポジウム　熊谷市前中西遺跡を語る－弥生時代の大規模集落－』
2014『考古学リーダー 23　熊谷市前中西遺跡を語る～弥生時代の大規模集落～』

熊谷市遺跡調査会　2001『諏訪木遺跡』
2013『上之古墳群・諏訪木遺跡』
2016『前中西遺跡Ⅹ』

熊谷市教育委員会　1979『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1980『中条遺跡群・中島遺跡』
1981『鎧塚古墳』
1982『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』
1983『めづか』
1984『中条遺跡群　光屋敷遺跡』
1999『女塚遺跡・女塚４号墳』
2001『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡　肥塚古墳群第 14・15・16 号墳』
2002『中条氏館跡』
2002『前中西遺跡Ⅱ』
2003『前中西遺跡Ⅲ』
2007『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳』
2008『藤之宮遺跡』
2009『前中西遺跡Ⅳ』
2010『西城切通遺跡』
2010『前中西遺跡Ⅴ』
2011『前中西遺跡Ⅵ』
2012『前中西遺跡Ⅶ』
2013『前中西遺跡　西別府館跡　王子西遺跡　立野遺跡』
2013『前中西遺跡Ⅷ』
2017『諏訪木遺跡Ⅲ』
2018『中西遺跡Ⅰ』
2018『前中西遺跡Ⅻ』
2019『中西遺跡Ⅱ』
2020『諏訪木遺跡Ⅳ』
2020『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』
2021『池上遺跡・鶴巻遺跡』
2021『藤之宮遺跡Ⅱ』
2023『前中西遺跡ⅩⅢ』

熊谷市教育委員会　2024『諏訪木遺跡Ⅷ』
熊谷市前中西遺跡調査会　1999『前中西遺跡』
2014『前中西遺跡Ⅸ』
2016『前中西遺跡Ⅺ』
埼玉県遺跡調査会　1971『横塚山古墳』
埼玉県教育委員会　1984『池守・池上』
1988『埼玉の中世城館跡』
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 21 集
1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集
1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 128 集
2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 278 集
2002『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 283 集
2003『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 286 集
2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 298 集
2007『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 336 集
2008『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 351 集
松田　哲　2017「埼玉県熊谷市前中西遺跡出土石戈の概要」『考古学研究』第 64 巻第 3 号　考古学研究会

写 真 図 版

発掘作業風景

調査区全景（南から）

調査区全景（東から）

図版２

第１号住居跡（南東から）

第２号住居跡（南東から）

第２号住居跡遺物出土状況（１）

第２号住居跡遺物出土状況（３）

第２号住居跡遺物出土状況（２）

第２号住居跡遺物出土状況（４）

第３号住居跡（南から）

図版４

第４号住居跡（南東から）

第４号住居跡遺物出土状況（１）

第４号住居跡遺物出土状況（３）
※第１号方形周溝墓北周溝出土

第４号住居跡遺物出土状況（２）

発掘作業風景

第１号方形周溝墓（南東から）

第１号土坑（南東から）

図版６

第１号住居跡　第６図１

第１号住居跡　第６図２

第１号住居跡　第６図３

第２号住居跡　第９図１

第２号住居跡　第９図２

第２号住居跡　第９図３

第２号住居跡　第９図４

第２号住居跡　第９図５

第２号住居跡　第９図６

第２号住居跡　第９図６底面

第２号住居跡　第９図８

第３号住居跡　第 11 図１

第３号住居跡　第 11 図１底面

第４号住居跡　第 13 図１

第４号住居跡　第 13 図２

図版８

第１号方形周溝墓　第 15 図１

第１号方形周溝墓　第 15 図２

第１号方形周溝墓　第 15 図３

第１号方形周溝墓　第 15 図４

第１号方形周溝墓　第 15 図５

第１号方形周溝墓　第 15 図５底面

第１号方形周溝墓　第 15 図６

遺構外　第 18 図１

遺構外　第 18 図１底面

第１号住居跡　第６図６～26

第１号住居跡　第６図27～48

第２号住居跡　第９図９～ 22

第２号住居跡　第９図 27 ～ 38

第３号住居跡　第 11 図２～ 11　　第４号住居跡　第 13 図３～９

第４号住居跡　第 13 図 10 ～ 26

第 1 号方形周溝墓　第 15 図 7 ～ 27

第 1 号方形周溝墓　第 15 図 28 ～ 47

第１号土坑　第 17 図１～４　　遺構外　第 18 図２～ 11

遺構外　第 18 図 12 ～ 24・28

図版 14

第１号住居跡　第７図 49 ～ 53

第２号住居跡　第 10 図 40 ～ 48

第２号住居跡　第９図 39

第４号住居跡　第 13 図 27
第１号方形周溝墓　第 15 図 48

遺構外　第 18 図 25 ～ 27

報　告　書　抄　録

ふりがな	まえなかにしいせきじゅうよん
書名	前中西遺跡ⅩⅣ
副書名	
巻次	―
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編集者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2024（令和6）年11月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
前中西遺跡（まえなかにしいせき）	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業52街区6画地（従前地：熊谷市上之字衣川2573番6他）（くまがやとしけいかくじぎょうかみのとちくかくせいりじぎょうがいくかくちじゅうぜんちくまがやしかみのあざころもがわばんほか）	11202	092	36° 08′ 45″	139° 24′ 21″	20230914 ～ 20230929	42.12	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前中西遺跡	集落 墓	弥生時代中期後～後期初	住居跡　4軒 方形周溝墓　1基	弥生土器、石器	報告地点は、弥生時代東側集落の中心に位置しており、弥生時代の遺構が激しく重複していた。
		時期不明	土坑　1基	弥生土器	

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 48 集

前中西遺跡ⅩⅣ

令和 6 年 11 月 22 日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／関東図書株式会社